

---

**これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～**

ラルド

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これはゾンビですか?~ いいえ、俺は人間です~

### 【Zコード】

N1115Y

### 【作者名】

ラルド

### 【あらすじ】

友達の相川 歩がゾンビになつてから全てがおかしくなつた。ただの人間である藤島 春樹はどんな日常を送るのでしょう。

## 第一話

今年も夏がやってきた。

俺が高校に入つて初めての夏だ。

俺は暑さには耐えられるほうだが、窓際に座つて いる男に目をやる。

「お、歩、大丈夫か？」

机で突つ伏している歩に声をかける。

「大丈夫じゃあねえよ」

突つ伏しながら返事をする。それもそつだろつ。なぜなら彼は……

ゾンビだから……

ちなみに俺はゾンビではない。人間だ。

俺の名前は藤島 春樹。<sup>ふじしま はるき</sup>なぜ彼がゾンビだということを知つて いるのかといつと、最近この町で頻繁に起きている連続殺人事件に関係している。

今から一か月前、午前一時頃に俺はコンビニへ出かけた。  
親は家にはいない。去年から海外旅行へ行つてしまつたのだ。  
近くのコンビニの前まで来てみると、相川 歩がわけのわからない

ことを彼の目の前にいる少女にやつていたのだ。  
歩もおかしいが、少女の格好もあきらかにおかしい。

なぜ鎧に籠手なんだ？

そんなことを思つてゐるとい、歩と田が合つた。

俺は携帯を取り出して……

「もしもし警察ですか？ ロンビーの前に幼女に手をかけようとしている高校生がいるんですけど」

「ちょっと待て———つ！」

歩は必死になつて俺のところへ駆け寄る。

「冗談だつて。誰にもかけてねえよ」

そう言つて歩に携帯を見せる。確かに誰にもかけていない。

「ビックリさせんじゃねえよ」

冷や汗を垂らしながら叫ぶ。

歩とは高校で知り合ひ、両方とも両親が海外旅行へ行つてゐることがきっかけでそのまま仲良くなつてしまつた。

そんなコントをしてゐると、先ほどの少女が俺たちの前へやつて來た。

彼女はスカートの中からボールペンとメモを取り出して、そのメモを俺達に見せた。

『面白かった』

どうやらい、やつやのやつ取りが面白つたらじー。

『だから一度とするな』

どうこいつ意味だ？ まあ別にこんな奴とやるのも嫌だからこいけど……。

そんなこんなで彼女は一言もしゃべらなかつたが、それなりに充実した時間を過ごさせた。

俺達は適当なところで話を切り上げ、歩が「じゃあ、またな」と手を振り、一緒に帰つた。

『気を付けて』

彼女手を振りかえそうともせず、ただ、生暖かい風に銀色の髪をなびかせていた。

俺は歩と別れて家に帰つたしだが、歩いて五分経つたころに気が付いた。

そういえば、アイツの置つたもの、俺が持つてたつけ。

きっと彼女と話をしていくことを忘れていたのだらう。急いで歩の家まで走つた。

しばらく走つていると、ある家の前で足が止まつた。

その家は、ドアが開きっぱなしになつたのだ。

しかも、玄関には見慣れた人が血を出しながら倒れていた。

「歩つー！」

俺は急いで彼の元へ駆け寄った。血だらけになつていてる体を起こした。

そのとき、誰かが俺の元へやつて來た。

コンビニの少女だった。

『彼から離れて』

メモに書いて俺に見せた。

『彼を助ける』

自分でもよくわからないが、彼女の言つとおりにして歩から離れた。  
彼女は歩の耳元で、俺に聞こえないようになにかさやいた。  
ささやいた直後、いきなり田の前が真っ白に光った。  
そして、死んだはずの歩が田を見ました。

「春樹に……お前。……俺は、生きているのか？」

歩の胸元を見ると、傷がぱつぱつと開いていても平氣な顔をして  
いた。

『死んでる』

メモには残酷な返事が書かれていた。

『私が死なないようにした』

メモに付け加えた。

「お前は何者なんだ？」

俺は彼女に問いかけた。

『ネクロマンサー』

普通はそんなことを言われても信じないだろう。だけど、死んだはずの人間が蘇つたとなると信じせざるをえない。

「待てよ。犯人は俺が生きているってわかっているのか？ もしかしたらまだ俺を探しているんじゃないのか？ 俺はまた命を狙われるんじゃないか？ 春樹もこんなのに巻き込まれて大丈夫なのか？」

今歩は明らかに気が動転している。

「落ち着け！ 俺のほうは顔も見られてないから大丈夫だ」

なんとか歩を落ち着かせた。

『心配ない 私が一緒に居る』

なぜだか、彼女の言葉には、それなりの重さがあった。

『私も命を狙われている だから 一人で居ない方が良い』

こうして、俺の友達、相川 歩は、ゾンビとなり、ネクロマンサーの『ゴークリウッド・ヘルサイズ』通称『ゴー』と一緒に住むこと

になつた。

そして、ここから奇妙な日常が始まつていいくのであつた。

## 第一話（前書き）

2話目です。毎日投稿でもなんらかにがんばりたいです。

## 第一話

話を戻して放課後、いつものように帰りの支度をする。

「春樹君。早く帰りましょ！」

幼なじみが俺に言つてきた。

彼女の名前は橘瀬奈。たちばなせな幼稚園の頃からの幼なじみだ。肩くらいまで伸びてある髪、顔は綺麗に整つてあり、かわいいといつより綺麗という言葉が似合つだらう。穏やかで優しい性格。

そして、男全員が田に留まつてしまつほどどの豊満な胸が特徴的だ。そのせいか、男と話すのが苦手になつてしまい、唯一話せるのが俺だけだ。

俺としか話せないせいで、俺が他の男達にとばしつをうけるのが……。

「ああ、分かつた」

俺は立ち上がり、教室を出る前にまだ机で寝ている歩に声をかけた。

「先に帰つてるぜ」

「おつ、また明日な

寝ながらの姿勢で手を振る歩。そして、そのまま瀬奈と家まで帰つた。

帰り道、俺は嬉しそうにしている瀬奈を見ながら歩いていた。

俺は週に一度、彼女の家にお邪魔して夕食を””馳走になるのだ。

俺達の両親が昔からの友達だったらしく、瀬奈の両親は俺のことを

歩いているうちに、いつの間にか別れる場所まで来たのだ。

「それじゃあ、またお家で会いに来なさい。

「おひ、楽しむにしむや」

頬奈に別れを告げて廻船へ歸る。

そして、自宅にいた後にやらないではいけない」とが一つだけある。

玄関に置いてある竹刀を掴んで庭へ向かった。

いたやんか！」毎日やれと言われて、メニーネをはじめはつづけないのだ。

じいちゃんの名前は藤島彦一。この世界では剣聖と呼ばれるほど  
の剣術の達人だ。

そして、俺はじい

それで、俺にしじみ、人から手の鍛錬を教わって来る。一ヶ月に一度は家に行き、そこでいろんなことをおしえてもらひうのだ。用事二つある間は、二つともヨー玉毎日からとづめつてこい。

えて片手に竹刀が入つて いる布を持ち、瀬奈の家へと向かう。

竹刀を持つていく理由は、歩がゾンビになつてからも殺人事件は続

自宅を出て五分で、瀬奈の家に着いた。

「おじやめします」

「「んばんは、春樹君」

瀬奈が玄関の前まで来てくれた。  
リビングに入ると、テーブルの上には夕食がのっており、おじさんとおばさんが椅子に座つて待つていた。

「「んばんは、春樹君」」

橘夫妻は笑顔で俺を迎えてくれた。

みんなとご飯を吃るのはけつこううれしい。

俺は遅れたことを謝つたが、気にするなど言い、許してくれた。

瀬奈の隣に座り、みんなで手を合わせた。

「「「「いただきます」」」

四人の声がリビングに響いた。

夕食も食べ終わつたころになると、七時三十分になつていていたので帰ろうと思つた。

その時瀬奈が玄関まで送つてくれた。

「最近殺人事件が起きてるけど大丈夫なんですか？」

「大丈夫だつて。あの竹刀も持つてきたし、俺が強いこと知つてるだろ」

「でも……」

どうやら瀬奈は俺をこの家に泊ませたいらしい。

さすがに年頃の男女が一つ屋根の下で泊まるのはマズイからなあ……

…。

俺は瀬奈の頭を撫でた。

「あ！」

撫でているとなんだかうれしそうな顔をする瀬奈。  
昔からこれがすきだつたんだよなあ。

「心配するなつて。また明日、会おうな」  
「は、はーーー！」

満面の笑みを俺に向けて言つた。  
俺は少し照れくさくなつたので、せつせつと靴を履いて竹刀を片手に  
持ち、玄関の扉を開けた。

血で帰る途中、俺は歩を見かけた。

「おー、あゅ……」

歩を呼ぼうとしたが、後ろに立ててきつている女の子を見てみると、  
なぜか裸にランランとおかしな格好だつたのだ。  
歩も俺に気づいたらしく、しまつた、という表情が見える。

「お前……、といづりの小学生だ……」

「違うからなー！ お前の言つてこなことは全部間違つてこなからな

ー！」

「よし、今すぐ自首しろ。罪は少し軽くなるぞ

「こやだから誤解だからあ————！」

「おー、アコム。やつきから何をやつているんだ？」

先ほどの学ラン少女が歩のところへやつて來た。

「春樹、紹介する。コイツは魔装少女のハルナだ」

「はあ……魔装少女ねえ……」

「アコム、こんな一般人に言つても信用してもらえないぞ」

「いや、信用する」

「うそ、マジで？」

それはそうだらう。なんせ歩はゾンビだし、その同居人も異世界人だからなあ。

「まあ、ここで話すのも何だし、とりあえず家で話すよ」

そんなこんなで歩の家にお邪魔した。

「お邪魔しまーす」

本日一回田のお邪魔しますだ。

リビングに入ると、ユーが正座でテレビを見ていた。

「ひさしひりだな、ユー」

『久しひり』

ユーと会つたのは歩がゾンビになつて以来だ。

それ以上何も話はせず、一緒にテレビを見ていた。

歩が着替えを終えてやつて來た。ハルナはまだ來ていない。

「よし、とりあえず、さつきの出来事を話すぞ」

墓地で偶然ハルナがメガロという化け物と戦っているところに遭遇し、偶然歩がハルナの魔力を奪い、偶然歩が魔装少女になり、そして現在に至ると。

そんな簡単な説明を受けて納得してしまったのも、俺がこの状況を理解してしまったからだろう。

いつの間にかハルナもユーをにらみつけながら座っていた。

「アユム、ご飯まだ？ お腹すいたんだけど？」

『肉がいい』

「はいはい。今すぐ作らせていただきますとも。春樹、お前も食べるか？」

「いや、俺はもう済ませてきたからいらないぞ」

「わかった。ハルナ、ユー。豚キムチでいいな？」

「うん！ それでいい！」

『素敵』

二人とも喜んでいる。異世界ではそんなものはないのだろうか。

「豚キムチですか……。私は味噌汁を頂きたいのですが」

知らない声がしたので、声がしたほうへ顔を向けると

美人の女性が座っていた。

## 第一話（後書き）

読んで頂もありがとうございます。次も是非読んで下さい。

## 第三話（前書き）

今のこと、毎日投稿継続中です。

今、俺達は夕食を食べている。俺はいらないと遠慮したが、結局出されてしまったので仕方なく食べている。

「ええと……どちら様？」

ポニー・テールで瀬奈と同じくらい胸が大きい美人の女性に尋ねてみた。

「私の名はセラフィムです」

……、自己紹介終わりかよっ！ 歩とハルナもそう思っているだろう。

「それだけ？ 好きなものとか特技とか、趣味とかあるじやん！」

代わりにハルナが突っ込んでくれた。

「好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返しです」

質問には答えてくれたが、なんだよ秘剣、燕返しつって……。

「なんでここにいるんだ？」

歩が彼女に質問する。

「任務です」

「どんな任務だ？」

「ユークリウツド・ヘルサイズ殿に、お力を借りしたい」

ユーの方に目を向ける。しかし、ユー本人はどうでもいいような感じだった。今でもご飯を食べていた。

ネクロマンサー、魔装少女。ここ最近、おかしな奴ばかり現れている。

次はなんだ？ 吸血鬼か？

「私の任務は、ヘルサイズ殿の同意のもと、同行を求める」ことです」「どこに？」

「忍者の里です」

「それじゃあ、君は忍者なのか？」

「はい、私は、吸血忍者です」

マジかよ。ほとんど当たってるじゃないか。忍者といつ単語を忘れていた。

ユーがメモに何か書き、俺達に見せた。

『歩 春樹 追い返せ』

「その必要はないんじゃないのか。ユー」

歩が反論する。

『かまわない いいから追い返せ』

『うやうやしくなさい』。

「ところで、あなたは、ヘルサイズ殿の何なのですか？」

セラ セラファイムは長いので短くした は歩を見てユーに尋ねた。

「俺はユーの保護者とこいつか、まあ……」

『下僕』

おかしな妄想をしている間にユーの回答がだされた。そのせいで、落ち込んでしまった。

「では、彼は」

俺を見て言つ。ユーはなんと答えるだろ? つか。正直、歩と同じレベルは嫌だ。

『友達』

おお、なんかうれしい回答だ。とりあえず、歩より上だと分かったのでよかつた。

「友達ならば仕方ありません。なりば、同じと同じよひて私が下僕になります。私のことはセラとお呼びください」

歩を差しながら真剣な表情で、セラは言つた。

そして、ユーは『下僕』と書かれたメモに何か付け加えた。

『下僕は 一人でいい』

「でしたら、あなたはいりませんね。どう見ても頭が悪そうだし「そこまで言つことないだる。おい、春樹も何か言つてやれよ」ま、確かにそうだな。彼女の方が優秀そудし「確かに、アユムはバカだからな!」

『確かに』

「お前ら全員俺の敵だあーー！」

「『』には歩の味方はいなかつた。

「でしたら、あなた。私と勝負をしませんか？」

俺を指で差しながら叫ぶ。

「どう『』ことだ？」

「『』のバカの代わりにあなたと戦うと叫んでござるんです」

「どうして俺なんだ？」

「あなた、かなりの剣の達人ですね。その体つきを見れば分かります」

「なつー！」

驚いた。まさか体を見ただけで分かるとは……。

「なにより、こんなバカと戦うより、あなたと戦うほうが有意義です」

「確かに、こんなバカと戦うとセラさんがかわいそうだもんな」

「はい、ですのでこのバカの代わりに勝負してください」

「おう、いいぜ。異世界の人と戦うなんて貴重な経験だ。このバカに代わって戦つてやるぜ」

「お前らさつきからバカバカ言つてんじゃねえーーー！」

歩の叫びが家中に響いた。

## 第三話（後書き）

やつと春樹が戦います。  
春樹はチートでもないので戦闘描写をつまくかけたらいいです。

どこか人のいない所でやりましょうと言われたので、歩がハルナと出会った墓地へ移動した。

墓地がきれいだったことに歩が驚いており、ハルナによると、魔法の力で壊れたものや、記憶を消去できるらしい。

「あなたの剣はどうするのですか？」

「心配するな。外に出るときは毎日持つてきている」

そうつ言い合って、持ってきた竹刀を布から取り出し、セリに見せた。

「竹刀戦うのですか？ それなら、もう勝負は見えていますね」「ま、普通はそう思うだろうな」

俺は竹刀を軽く振った。

そうしたら、竹刀が突然刀に変化した。

これを見た三人 ユーは来ていない は驚いていた。

「まさか、あなたも魔装少女なのですか！」

「ちげえから！ 男の魔装少女はアイツだけで十分だ！ 俺もよく知らないが、じいちゃんがくれたんだ。あの人、こういうカラクリが好きだからな」

「まあ、いいでしょ。それでは、始めましょ」

「あーちょっと待て。一つ、聞いていいか？」

戦闘が始まるとこりで、歩が声をかけてきた。

「なんですか？」

「吸血忍者とやらは、人を殺すのか？」

「殺しはしませんが、少し血を分けてもらひだけです」

「それを聞いて安心した」

歩が俺達から少し離れる。

俺を心配したのか、それとも自分を殺した犯人を聞いたのか、もしくは両方なのか、俺には分からぬが安心していた。

「それでは、改めて始めましょう」

セラの瞳が赤になり、全身を覆つよつた黒いマントが現れた。どうやら戦闘態勢に入つたらしい。

「いきます」

その一言で、セラの姿が消えた。

俺は全身に悪寒が走り、咄嗟に一步下がつた。

下がつた瞬間に、俺の胸元が浅く切られていた。

『好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返し』

歩の家で自己紹介したことを思い出した。

秘剣、燕返し　かの有名な佐々木 小次郎が得意とする剣技だ。

一度切りつけた後、二太刀目に真の一撃を放つ技だった。

切られた痛みを我慢して、二太刀目の攻撃は避けられないと反応したので咄嗟に刀で防御した。

案の定、セラの一太刀目は防ぐことができた。避けていたらやられていただろう。

「人間にしては見事です。まさか一回目で私の燕返しを防ぐとは」「そいつは、どうも」

つば競り合いをしながら会話をする。どうやら彼女の剣は葉っぱで出来た剣だった。

そのままつば競り合いのまま、刀を離し、セラが前のめりになつたところで背中に回り込み、地面に思いつきり叩きつける。だが、さすがは吸血忍者。そんなんではやられたりはしない。

俺は急いで刀を取り、後退する。

「甘肃見ていました……。まさかあそこで剣をするなどとは……」

セラはまるでダメージがないかのように平然と立ち上がった。そして、彼女の背中から、緑色の翼が生え、上空に飛んだ。

「秘剣、燕返し。八連！」

上空からハツの斬撃を飛ばしてきた。もはや燕返しですらない。俺は斬撃を一つ一つ受け止め、攻撃を防いでいるが、完全には防ぎきれず、所々で体に傷ができる。

三、四、五……、刀で受け流すのはいいが、そろそろ刀も限界に近づいてきた。

さつき、ピキッつて聞こえたからなあ。

七、ハ！ やつと終わつた。

斬撃が地面へいったので、俺は土煙で隠れている。

そのせいか、セラが俺を探すために少し高度を下げた。

このチャンスを逃すわけにはいかない！

俺は墓石を踏み台にして、セラにめがけて跳んだ。

土煙から出た俺に気づいた時にはもう遅かった。既に背後を取られ

ていたのだ。

「藤島流 紫電！」

相手の頭に向かつて刀を振つた。もちろん、みね打ちでモロにくらつたセラはそのまま地面に激突した。

「くっ！」

さすがに頭を叩いたので、簡単には立てなかつた。俺はセラの背後に着地し、そのまま首筋に刀をおいた。

「俺の勝ちだな」

「参りました。油断していたとはいえ、負けは負けです」

「本当に俺の勝ちだぜ」

念のため、もう一度言つ。

「はい、私の負けです」

「ふうー。いやー、あぶねえあぶねえ。見事に騙されてくれてよかつたぜ」

そう言つて、俺は刀を離す。

地面に落ちた刀はバラバラに崩れてしまった。

「なつー！」

それを見たセラが目を見開いた。同じく歩とハルナもびっくりしていた。

「正直言つてあぶなかつたぜ。頭をたたいた後、完全に割れかけてたんだからな」

「い、今参つたは無効です！　もう一度勝負をお願いしたい！」

「おーおー、俺は二回も聞いたんだぜ、俺の勝利を。お前は二回ともはいと言つたんだ」

「くつ

見事に悔しがつてゐる。これで帰つてくれるだらう。

「わかりました。それでは、私は家に帰らせていただきます」

俺を最後に睨みつけながら、消えていった。

「お前、かなり強かつたんだな」

歩が俺のところに来て、感心する。

「伊達に子供のこりから鍛えてないぞ」

「そりいえばお前、傷は大丈夫なのか？」

ハルナもやつてきて俺の傷を触る。

「こつこつて――！」

最初にやられた胸元の傷があつたのを忘れていた。  
くそつ、意識してたらだんだん痛みが出てきたぞ。

「やめろー。触るな！　チビー！」

「むつー。」

怒ったのか、せりて強く傷口に触れてくる。

俺は痛みに耐えきれず

そのまま気絶した。

田が覚めると、そこは歩の家だった。べつせりぬいていたらい  
い。

携帯の時計を見ると、夜中の一時だった。  
胸の傷を見たが、なぜか傷口はなかった。

「田が覚めましたか

「うおー。」

いきなりセラが出てきた。

「つて、なんでお前がいるんだよ？ 帰ったんじゃないのか？」  
「いつたはずです。家に帰ると」  
「ああ、なるほどー。歩の家なのか つてここに住むのかよー。」  
「はい、任務を果たすために。そういうことなので、私は不本意な  
がらクソ虫の下僕になることこじました」

クソ虫ってのは歩のことだらつ。

「やついえば、切られた傷はお前が治してくれたのか？」  
「いえ、その傷はヘルサイズ殿が治しました」  
「やだつたのか。後でお礼を言つとかないとな」

明田でも言つておひづ。

「やして、もう一つ、やうなへばこななことができました

「へえ、なんだ？」

「あなたを倒すことです

「あれはほととどお前の勝りだ

「それでも、負けは負けなので

「てへへ、吸血忍者つてのはプライドが高ひらしー。

「はーはー、わかりましたよ。またいつか、戦つてやるよ

「約束です

「あひやせり、彼女はこの場から消えた。  
俺も今田まじで寝てひみつと思つ、もう一度寝なおした。

## 第四話（後書き）

紫電　　相手の頭上まで飛び、頭にめがけて高速で打ち下ろす剣技。

初めて剣技を書いてみました。他にもいろいろ書くようにします。

本日は土曜日。俺は起きるのがめんどくさいので、午後までずっと寝ていた。

一時になつてめつと起き、リビングに行くと、みんなそいでテレビを見ていた。

「みんな、おはよう」

『おはよう』

「よう、刀の。遅かつたじやないか」

「まったく。とっくに昼は過ぎていますよ」

「やけに遅かつたじやん。体は大丈夫なのか？」

俺は座り、みんなと一緒にテレビを見た。

「つていうか、なんだよハルナ、『刀の』つて

「あなたの名前、忘れたからそう呼んでいる」

「昨日、名乗つただろ！」

「私は天才だから人の名前覚えるのがめんどくさいんだよ。」

これ以上言つのはよめつ。なんだか、ハルナに言つても無駄なよつな気がする。

「ユー、昨夜はありがとな。傷を治してくれて」

『気にしなくていい』

「」で話が途切れたので、テレビを見ることにする。

ちょうど天気予報が放送され、今日の夕方から雨が降るらしい。

雨？

「ヤバい！ 洗濯物取り込むのを忘れていた！」

昨日は家に帰っていないから、洗濯物がそのまま干されたまんまだつた。

「悪いが、これで帰らせてもらひ。また来るからなー。」

俺はダッシュで家に帰った。

だんだんと雨がパラパラと降ってきた。

ようやく家に着いたが、すでに洗濯は取り込まれていた。扉には鍵がかかっていなかつた。

きっと瀬奈が入っているのだろう。

「ただいま」

「あっ、おかえりなさい。春樹君」

やはり瀬奈だつた。

「洗濯物取り込んでくれたのか？ ありがとな」

「え、別にいいですよ。そ……それに、これつてま……まるで新婚  
だ

いきなり瀬奈の声を遮るかのように、俺の携帯が鳴つた。  
相手は歩だつた。

「もしもし？」

「春樹か？ 実は織戸が連續殺人事件の生き残りの子に会わせてくれることを言うのを忘れていたんだ。お前も来るか？」

「わかった。いつ集合なんだ？」

「四時くらいに地元の病院で」

「了解」

携帯を閉じる。

連續殺人事件。なんで俺がその事件に関わりたいと思ったのは、不謹慎だが、こういうトラブルみたいなことが好きだからだ。そのおかげで、俺は異世界人と会うことができた。これ以上に面白いことはないだろう。

時刻は一時半。まだまだ時間はある。

「瀬奈。俺、夕方ころに出かけるから、帰るときは鍵をかけなくていいぞ」

「え、は、はい……」

「あと、まだ時間があるから、宿題教えてくれ

「は、はい！」

集合時間まで、瀬奈は宿題を終わらせていたので俺の宿題を手伝つてもらつた。

四時、俺は歩の言われた通り病院の入り口で待つていた。雨はもうやんでいる。

今回もスペアの竹刀を持ってきた。

待つこと五分、歩と織戸が一人でやつて來た。

「あれ？ 春樹まで來てたのか？」

「歩に誘われたんだ」

「そういうこと」

そして、三人で病院へ入った。ちなみに織戸というのは、簡単に言つとシンシン頭の変態だ。歩を通して仲良くなってしまった。

入院している子の部屋に入ると、そこには女の子がこちらを見ていた。

「あ、織戸先輩！　え？　あ、いかわさん？」

歩を見るなり、顔を赤くした。

「おいつ、京子！　髪型はツインテールにしどけって言つといただろ？　相川はツインテールに萌えるんだぞ！」

織戸に言われ髪を結ぶ京子。

そしてツインテールにして、事件の出来事を話してくれた。彼女を襲つたのは、青く、きれいな目、年齢は彼女と同じくらい。それを聞いた俺と歩は耳を疑つた。顔を見合わせ、彼女に聞いてみる。

「妙なガントレットを付けた、銀色のサラサラヘアー？」

歩が言い、彼女は「そうです！」と肯定した。そして、今度は俺が聞いてみる。

「襲われたのはいつなんだ？」

「たしか……五月二十六日の深夜です」

おこおい、その日歩がゾンビになつてゴーと初めて出合つた日じやないか。

俺はなんとなく窓側へ行き、窓を開ける。

そのときベッドの下から何かが出ているのを見た。しゃがんでベッドの下を見ると、木刀が置いてあつた。

「なんで木刀が？」

「我が家に伝わる伝統の品です。なんちゃって」

ジョークを言つ京子。歩は微笑ましい表情で彼女を見ている。でも、俺はあの木刀が気になつたが、これ以上の詮索は彼女のプライベートに觸れるかと思ったのでやめた。

病院から出ると、織戸が歩に向かつてお礼を言つた。

「別に、俺は何もしてないぞ？」

「京子は相川の顔が見れただけで満足してんだよ」

歩は照れくさくなつて、織戸から手をそらす。

「はん。こんな奴のどこがいいんだか」

どこかで聞き覚えのある声がした。

声のする方向に顔を向けると、ハルナが立つていた。

しかもその格好は、ワイシャツとピンクのヒモパンだけだった。

「お前、なんて格好してんだよ」

あきれた様子でツツコむ。

「お、おい相川、春樹、なんだこの極上美少女は？」

織戸は呆然と立ちすくんでいた。

「いりー、いっち見んなつー！」

ならそんな格好するなよ！ と心の中でツツコむ俺。

今思うと、ハルナが来たってことは、近くにメガロがいるのだろう。俺は、まだ一度もメガロを見たことがないので、かなり気になる。メガロは学ランを着ているのが特徴だと歩から聞いた。

ハルナは、上を指して俺達は空を見上げた。

そこには、学ランを着た巨大なシロナガスクジラのメガロが浮かんでいた。

## 第五話（後書き）

また、春樹が戦うかもしれません。  
明日も投稿できるように努力します。

「おーおー、あいや 何だよ?」

俺は上を見ながら初めて見るメガロに驚いた。でかすぎだろ。  
歩が最初に戦つたメガロは熊つて聞いたけど、これつて勝てるのか?

「あれがトリプルAランクのメガロ、常敗無勝のシロナガ!」

「何だよそれ! 常敗無勝つて一度も勝つたことがないのかよ!」

「間違えた。えと……え、あー 悪魔男爵シロナガ!」

適当に答えるハルナだった。

「ハルナ、春樹! 織戸を頼んだ」

「わかつたけど、お前アレに勝てるのか?」

「いいから早く倒せよな! あたしんために! あたしじだけのため  
に!」

「お前はもう黙つて!」

俺はハルナの頭を叩いて織戸に近づいた。

「当身!」

「うふつ!」

織戸を氣絶させた。そして、そのまま織戸を肩に担いだ。

「俺にははじつよつもないから、後は頼んだぞ  
「わかつて!」

歩は走つて病院の屋上まで跳んだ。

「おー、ハルナ。ここから離れるべー。」

とつあえず、俺達はここから離れることにした。

病院から数メートルの所まで離れた。

歩のほうは、見てみるとどうやら苦戦している。助けてやりたいのは山々だが、俺達にはどうすることもできない。そんなとき、ハルナの近くの木にあるチョーンソーを見つけた。よく見ると、あれは昨日の夜に歩が持つっていたやつじゃないか。

「あー、セウだ！ これを渡さないと魔装少女になれないんだ！」  
「やつは大事なことば早く言えよー。」

織刀を適当な場所に置き、チョーンソーを持った。

「これを歩の所に持つていけばいいんだな  
「あたしも行くぞー 結界を張ることくらいこなしちゃう

「よー、行くぞー」

病院の屋上まで向かった。

「おー、歩ー」

屋上に到着してすぐ、苦戦している歩にチョーンソーを投げ込んだ。

「げ、これってまさか」

「変身方法は教えたとおりにやれよ！」

ハルナが両手を上に掲げ、結界を張つていた。

「 つそ！ ノモブヨ、 ヲシ、 ハシタワ、 ドケダ、 グンニーチヤ、  
テー、 リブラ」

呪文を唱えると、歩が光った。そして、光の中からは変態が出てきた。

「くつそお！ ここのコスプレだけは嫌だつたんだよ！」

歩が近づいてきたので、俺は距離をとつた。

「近寄るな変態」

魔装少女になると空も飛べるのか。

シロナガを切ろうとしても、敵がでかすぎるため、深くは切れなかつた。

しばらくすると、また屋上に戻ってきた。

「アコム！ 早く倒せよな！ もお、無理につー！」

どうやらハルナも限界らしい。

どうしようかと考えていろと聞いて、セツが屋上にやって来た。

「あれ？ どうしてセラファイムがいるんだ？」

「ヘルサイズ殿に頼まれて来たのですよ。それにしても、歩。その

格好はとても気持ち悪いですね。」

「ああ、その意見には同意だ。その格好はとても気持ち悪い

「いちいちもう一度言つなよ！」

「とりあえず、あれを倒せばいいんですね」

そう言つて、緑色の翼を羽ばたかせシロナガに向かつた。  
歩もセラに付いていく。

そして、セラがシロナガの首下半分を切り、歩が全力で蹴つた。  
シロナガはべきつとは折れず、爆発した。

急いで俺とハルナは下に降りて歩たちの元へ向かう。

「おい、大丈夫か？ セラファイム、変態

「ええ、大丈夫です」

「俺、もう泣くぞ」

歩は魔法で建物の修復と記憶の消去を行つた。

首をかしげる歩に聞いてみる。

「あれ？」

「どうかしたのか？」

「お前の記憶も消そうとしたんだが、なぜか消せない」

「まあ、いいじやん、それくらい

軽く受け流す俺だった。

「春樹！」

セラが木の葉を剣に変えて両手に持つた。深紅の瞳は俺に向けていた。

いや、違う！

俺は後ろから殺氣を感じ、瞬時に肩にかけてあるケースを手に取り防御した。

竹刀に何かが当たった。この感触は、もし防御しなかつたら心臓を貫かれていただろう。

相手を見ると、そいつは学ランを着たアリクイだった。

本日一匹目のメガロだ。

「あれは、ヘビー級メガロ、モハメド・クイ」  
ハルナが言うと、アリクイは俺から離れて、軽くフットワークをとる。

「おい歩、また変身しろよ」

「あ、魔装少女になれるのは二十四時間に一回だけだから」

マジかよ。

セラを見てみるが、翼は消えており、少し疲れているよう見える。

「セラフィム、大丈夫か？」

「いいえ、血が足りないせいか、力が出ません」

セラはどひやら戦えないらしい。

「しようがない。歩、二人で戦つぞ」

「足引つ張んなよ！」

竹刀を刀に変え、アリクイに向けて構える。その隣で歩がボクシングのような構えをとっている。

「ハルナ。一つだけお願ひがあります」

「な、何だよ。変なことなら、蹴るからな」

「あなたの血がほしい」

後ろからそんな言葉が聞こえ、一人は何かをしている。

俺はその光景は見えず、アリクイと戦っている。

何だか、ハルナが嗚咽のような悩ましい声を出しているから余計気になる。

アリクイを蹴り飛ばして、ハルナ達のほうを見てみた。その光景を見ていると、なんだかこいつちまで恥ずかしくなつてきたので戦闘に集中した。

アリクイは素早い動きで俺達を攻撃してくる。幸い俺は何とか見えているから防げるが、歩のほうは見事にボコボコにされている。

ゾンビでも、動体視力までは上がらないらしい。

「危ない！」

俺は歩を突き飛ばし、さっきまで歩がいたところには何かが出てきた。それは、アリクイの舌だった。

最初の攻撃も舌だったのだろう。

俺は反撃をするために、アリクイの懷に潜り込んだ。上段から刀を振つたが、避けられてしまった。だが、避けられた瞬間にもう一度構え、相手の腹を突いた。

「藤島流 おいかけ 追懸！」

相手の腹を貫いた。

けど、アリクイは腹に喰いこんでも平然としていた。刀を抜き、アリクイから距離をとる。

「お待たせ致しました」

やつとセラが来てくれた。

「遅いぞ。俺ももう疲れたから、後は頼んだぜ」「わかつたます」

ボロボロになつてゐる歩を引きずりながら、ハルナの所まで避難した。

「木の葉の如く舞い飛ぶ剣、即ち　　」

木の葉が大きな剣に変わる。

「飛剣、百鬼漸殺」

一瞬でアリクイがやられた。　やつぱり強ええんだな。  
一瞬でケリをつけるセラに関心を持つ。  
俺は手を挙げ、セラは何も言わずに俺の手を叩いた。

「歩、彼女のこと、どう思つ」

「いきなりなんだよ。まあ、あの子は嘘を言つてゐるよつには見えなかつたがな」

「そつか……」

帰り道、京子という少女が気になつたので歩に聞いてみた。  
正直、俺はユーが犯人とは思えなかつた。それに、彼女のベッドの下にあつた木刀。いつたいあれは何なのだろうか。

「それじゃあな」

「なんだ？　飯食つてかないのか？」

「今日はコンビニの弁当が食いたい気分なんだよ」

そつこつて俺は歩と別れる。

家に着くと、家には電気が点いていた。

「まさか……」

扉を開け、台所まで行くと、瀬奈が料理を作っていた。

「あつ、春樹君。おかえりなさい」

「ああ、ただいま、つてお前帰つてないのかよ。親は大丈夫なのか？」

「はい、お父さんたちには言つておいたので今日は泊まつてきます」「はあ……しょうがねえなー」

今までも何回かあったので、もつ諦めかけている。

コンビニ弁当はまたいつか食べようつと想い、出来上がつた料理を一人で食べた。

途中、歩からメールが来たので携帯を開いてみると『助けて』と書いてあつたが、後からまたメールが来て『心配いりません』とセラが書いたメールが送られてきたので無視した。

## 第七話（後書き）

追懸 おいかけ 上段から刀を振り降ろし、相手が避けた所構えなおして、  
突く技。

一つ目の剣技を書けました。もう少し書いていきます。

「春樹君、一緒にボウリングへ行きませんか?」

昼飯と一緒に食べている瀬奈から誘われた。

「なんていきなりボウリングなんかに行こうと思つたんだ?」

「友達からボウリングのタダ券をもらつたんです。使わないのももつたないので、お昼食べてから行きませんか?」

「家に居ても暇だからな。よしつ! 行こうぜ!」

いい気分転換にもなるしな。

すぐに昼飯を食べ終え、着替えをして、竹刀をケースに入れて準備ができた。

今日は平穏に過ごしたかった俺であった。

ボウリング場に着き、早速ゲームを始めた。

ゲームが後半までやると、何やら近くで聞き覚えのある声がある。

「げつ!」

歩と織戸だ。

さらにハルナ、ユー、セラの三人までもいた。

まさかあこつらもここまで来るとは思つてもみなかつた。

「どうかしたんですか?」

瀬奈が心配して俺に聞いてくる。

「大丈夫だ、問題ない」

「？」

焦りながら言う俺に首をかしげている。  
なんとか誰にも気づかれずに終わらせたかったが、その願いは早く  
も打ち砕かれた。

「おい、あそこにいるの『刀の』じゃねえ？」

ハルナが大声で叫んでくる。

終わつた。

早くも俺の平穏が終わつた。

「春樹、何をしているんですか？」

「セラファイムか。見ての通り、ボウリングをしているんだが」

「そんなことは分かつています。あなたの隣にいる人は誰かと聞い  
ているんです」

隣に座つている瀬奈を見ていた。

「春樹君、あの人、誰ですか？」

「はあ、紹介するよ。彼女はセラファイム。今、歩の家に居候してい  
る人だ」

「どうも」

頭を下げるセラ。

「そして、彼女は橘 瀬奈。俺の幼馴染だ」

「橋瀬奈です」

彼女も同様にお辞儀をする。

「じゃ、そういうわけで」

早くここから抜け出したかったので、瀬奈の手を掴み、帰ろうとした。  
だが、セラが俺にこう言つてきた。

「ここで会つたのも何かの縁です。勝負しませんか?」

ピタリと足が止まつてしまつた。  
勝負と言われてどうしようかと迷つてしまつた。

「どうしたんですか? 別に逃げてもいいのですよ」  
「上等だ、やつてやる! じやねえか!」

見事に相手の罠に引っかかる俺だった。

結果は惨敗。俺は三回ぐらいしかストライクを取つていないが、セラは全部ストライクだったのだ。

つていうか、それって反則じやね?

スプリットの時なんて、ボールが直角に曲がつてたぞ。

「私の勝ちですね」

ふふつと笑つセラだった。かなり悔しい。

「ま、あれはじょうがないだろ」

俺を慰める歩。歩達もこの試合を見ていたようだ。

「おーおー、お前まであの美女たちのことを知つてんのかよー。た  
だでわえ櫂さんと付き合つてこむとこつのは」

「付き合つてねえよー！」

織川は羨ましそうに俺を見てくる。マジで気持ち悪い。

「アコム！ 服買つて！」

ハルナが歩に抱きついてきた。どうせや、ボーリングでパーフェク  
トを出したらしい。

結局、みんなで衣服売場まで行くことになった。

ハルナは歩を連れまわし、衣服を見ていた。

俺の後ろにいるセラも物欲しそうに服を見ていた。

「欲しいものがあたら買つてやるよ」

「いいのですか？」

「まつ、ボーリングに負けたからな。それくらいのことはせこいぞ

「あ、ありがとづ」

笑顔で俺に返してきた。なんだか照れくさくなる。

「春樹君、私もいいですか？」

「はあ、お前のもついでに買つてやるよ」

「ありがとう、春樹君！」

瀬奈も嬉しそうに服を選びに行つた。

途中でセラと一緒に服を選んでいたのが目に入った。ちゃんと話せついて、安心した。

俺も服を買おうかと適当に見ていたが、偶然歩とゴーがエレベーターに乗つていくのが見えた。

気になつてエレベーターの前まで行き、エレベーターが止まつた先是屋上だつた。

何か大事な話をするんだなと思い、もう一度服を見に行つた。

いろんなものを買い、デパートの入り口でみんなと別れた。俺は今、瀬奈と一人で帰つている。

「今日は楽しかつたですね」

「ああ、お前も友達ができてよかつたな」「はいー」

意外とハルナ達と会話が弾んだらしく、今でも嬉しそうな顔になつてゐる。

適当に話をしている内に、瀬奈の家までついたようだつた。

「それじゃあな」

「「」飯、食べていかないんですか？」

「今日はコンビニで済ましたい気分なんだよ」

昨日食べられなかつたので、今日こそ食べたいと思つた。

別れを告げて、コンビニまで向かおうとしたが、突然歩からメールが来た。

『ピザでもとりうと思つんだが、お前も来るか?』

一発でOKメールを送った。コンビニはいつも買える。だが、ピザは高いから一人暮らしの俺にとっては、ほとんど食べられないものなのだ。

行先をコンビニから歩の家に変えた。

「ピザ食いに来たぜ！」

速攻で歩の家へ行き、力強く扉を開けた。

「はつ！」

玄関には鏡の前でネ「///」を付けながら「にゃー」とポーズをとつていたセラがいた。

見てはいけないものを見てしまったような気がする。

俺はそーっと出て行こうとしたが、セラに手首をものすくい力で握りしめてきた。

「忘れなさい」

「い、いや……」

「忘れなさい

「……はい」

今日のことは胸にしまっておこうと呟つた。

「やつたーあ～っ！」

大はしゃぎになるハルナ。

テーブルの上には、シーフードとピザ、せりが並んでいた。

かくいう俺も、早く食べたいという衝動に駆られていく。

「ピザなんて何時振りだろ？」「

早速手を伸ばす。シーフードのピザなどでもつまむ。隣に座っているセラを見ると、何故かピザとこりあつていて、

「何してんだ？」

「私は和食以外を口にしたことがあつませんので、恥ずかしながら少々怖いのです」

「いいから食べてみろって。早くしないとなくなっちゃうぞ」

俺の言葉に従い、ピザを食べてみるセラ。一口食べたら、美味しいと思つたのかどんどん食べ始める。

「素晴らしいですね。これほどよ……」

セラもお気に入りしたので、みんなでピザをお腹にいっぱい食べれる」とができた。

「アコム、携帯貸して」

「ほらよ

食べ終わつたハルナが誰かに電話をするらしい。

「あ、大先生ですか？ え？ あ、そうですか。でしたら、リフレイン年ライジング組の出席番号「六二三四五」（六二三七九のハルナから電話があつたことだけ、お伝えください）

「なんだよお前のクラス！ 一クラス何人いるんだよー。」

思わずシッコんでしまつた。なんだよ、リフレイン年ライジング組

つて。

「どうやらハルナは、この世界にいるアーティファクトのことで電話をしたらしい。」

「なんだ？ アーティファクトって？」

歩が尋ねてみた。

「たしか……名前はキョウウドウ……キョウウフ……恐怖つてこう名前だつたような」

「それって形があるものなのかな？」

「当たり前だろつー」 ひへ、四角くて柔らかくて」

歩は俺達を見て「知ってるか？」と聞いてみたが、俺にわかるはずもないでの、首を横に振った。

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

「俺が出るよ

俺は立ち上がり、玄関まで向かった。ピザを奢つてもらつたし、それくらいにしておこうと思つた。  
扉を開けると、一足歩行のダーベルマンがいた。

「どうも、自分はケルベロス・ワンサーードと聞こます

絶対にシッコま niede。

なんとか我慢をしてる俺。

「何の御用ですか？」

「あなたはまだ生きてこるのでこいのですが、相川 歩さんを呼ん

でくれませんか？」

「はあ……」

とつあえず歩を呼びに行き、そのままジビングでくつろごだ。

「誰だつたのですか？」

「ん？」足歩行のダーベルマン

そんなことを言つてはいるが、突然歩が肩をおさえながらゴーの元まで来た。

「ゴー！　すまん。いきなりだが治してくれー！」

ゴーは無表情のまま左手のガントレットを外し、歩に手を当てた。すると、出血は止まり、傷は癒されていた。

「れつて、俺がセラと戦つた時にも治してくれた能力なのか？」

「ゴークリウジド・ヘルサイズ様ではありますか。最近見ないと思つたら、こんな所に」

ダーベルマンは歩とゴーを見つめ、何かを語つたらしく座りだした。

「まったく、あなたの仕業ですか……。そうとわかつてはいたりこんな所には来なかつたのに」

『忘れてた』

「もう、俺とは戦わないのか？」

「はい、ヘルサイズ様がしたことなので」

なんだかよくわからないまま、歩の戦いの件は終了してしまつ

た。

「わかつてますか？ 相川さん。ヘルサイズ様があなたの傷を癒した意味

「はい？」

『大丈夫 耐えられる痛み』

「ヘルサイズ様は対象物を治す代わりに、自分がその分の痛みを請け負うのです」

つてことは、俺が以前治してもらった傷もユーが請け負つたってことか？

「ユー、すまんかった」

「俺も、悪かつたな」

歩と俺の二人でユーに謝る。

『かまわない』

本当に申し訳ない気持ちになった。

「でしたら、私はそろそろお暇させていただきます。そうそう、この近くで人が殺されかけているので、その魂も連れて行こうかな」「ちょっと待つた！ 俺も連れてつてくれ」

急に歩が言い出す。確かに、ドーベルマンの後を追えば歩を殺した犯人が分かるかもしないからな。

そして、歩はドーベルマンと一緒にどつかへ行ってしまった。

歩が出かけてから十分くらいが立つた後、俺もそろそろ帰るよと黙つて自宅に向かった。

いつものように竹刀は持つてきている。いつ襲われるかわかつたもんじゃない。

人は誰もいなかつた。今、ここを歩いているのは俺だけだ。だが突如、背後からすごい殺気が襲ってきた。

急いで横つ飛びをし、さっきまで俺のいた場所には俺の心臓を刺そうとしていた刃物があつた。

夜で顔は見えないが、そいつから距離をとつた後、竹刀を刀に変え構えた。

「驚きました、まさか私の金縛りが効かないなんて」

「誰だ、お前？」

声からして、明らかに女の声だつた。だが、肝心の顔が見えない。

「今日はもう、殺すのはよしましょ。さっき犬のメガロと男性を殺して満足しましたので」

どうやらドーベルマンは殺されたらしい。

だが、歩がゾンビだとわかつていなかつたのは幸運だ。まだ生きているだろ？

「それでは」

彼女は消えた。さっきまでの殺気はもうなくなつた。俺は安心したのか、膝が急に笑い始めた。

「やべえな」

恐怖とかそういうもんじゃない。きっとこれは武者震いだろ。次に会つたら、戦つてみたい。そう思つてしまつたのだ。俺は家に直行し、すぐに寝た。

俺は朝、早めに起き、歩の家へ向かった。  
昨日の夜の出来事をみんなに話した。

「お前、よく生きていたな」  
「ああ、今でも不思議に思つてゐるぞ」  
「それで、連續殺人の犯人は女性なのですね？」  
「確かに声は女性だつた」

犯人の特徴を教えると、今度は歩がユーのことについて話してくれた。

デパートの屋上でのこと、昨日俺が帰つた後のことだ。  
まずユーの能力は、ユーの言葉を聞いた人間は無差別にその言葉の通りになつてしまふこと。

そして、彼女はメガ口側の人間、つまりメガ口は冥界で作られているということだ。

「なるほどな……」

ユーの正体を知り、うなづく俺。

『嫌いになつた？』  
『んなわけないだろ。お前は俺の友達だ』

ユーはこれ以上何も書かなかつた。

「とつあえず、そろそろ学校に行こう。ないうちに」

時計を見たが、まだ六時にもなっていない。

「俺もついでに行くか

俺と歩は立ち上がり学校へ行こうとするが、ヨーが新たに何かを書いてテーブルを叩いた。

『今日はここにいる

命令形だった。学校をサボるわけにはいかないので無理だと言った。

学校ではのんびりと授業を受け、何もイベントは起きないまま放課後まで過ぎていった。

途中、織戸と歩から京子の見舞いに誘われたので一緒に行くことにした。

「悪いな、今日は用事があるから先に帰つてくれ

「なら、私も一緒にいます！」

「いや、その用事は夜までかかるし……最近殺人事件もあるし、お

前は家に帰つてろよ

「殺人事件？ そんなの、最近起きていませんよ

「え？」

俺は瀬奈の言葉に耳を疑つた。

『どうしたことだ？

最初は疑つたが、時間もないのと後で考えよつと思い、瀬奈を強引に帰らせた。

病院まで到着し、京子の部屋まで行く。京子は歩が来たことを喜んでいた。

「あ、相川さん、これ……」

京子は歩に何故か豆腐を渡してきた。

そういうえば、登校中に歩が言っていたなあ。ハルナのアーティファクトが京豆腐だと……。

そんなことも思つたが、俺はもう一つのことを疑問に思つた。似ている。

昨日の夜、俺に話しかけてきた女に……。

ここで言つてもきっと頭がおかしいと思われるで明日だけでも聞いておこうと思つた。

「どうかしたんですか？ もしかして熱でもあるんじゅ」

京子は俺の額に触り、熱を測るつとするが、なにことがわかりすつと手を戻した。

「やあひそろ帰るわ」

歩が咳き立ち上がる。俺も歩に続く。

「あ、じゃあお見送りします」

京子がやつ言い、ベッドから降りた。織戸はトライへ行き、先に退室する。二人で病院の入り口まで向かう。

京子は俺達が見えなくなるまで手を振つていくつもりなのか、ずっと俺達のことを見ている。

歩は大先生とかいうやつに電話をする。

隣にいても聞こえなかつたので、電話を切つた後に聞いてみた。なんでも、手に持つている京豆腐を九時に墓場まで持つていくという内容だった。

今日は歩の家で泊まることにした。ユーに言われたのでここにいることにした。

『変わつたことは?』

特になかつたので、一人で首を横に振る。その後、何も言わずにテレビに目を戻した。

みんなが居間に集まると歩は九時に墓場で大先生に会いに行くと云ふると、みんなに言つた。

「俺も行つていいか? 大先生つていう人に会つてみたいし「別にかまわないので」

俺は歩と一緒に墓場まで向かつた。

墓場まで着くと、卒塔婆の陰に人がいた。

「大先生ですか?」

歩が陰にいる人に言った。

だが、その人は返事をせず、歩に向かつて刃物で突き刺した。

「なつ！」

「こんばんは。相川さん、藤島さん」

にっこりとほほ笑み、俺は歩を掴み彼女から離れた。

「あなたは何回殺せば、死ぬのですか？」

見たことのある木刀と剣を両手に持ち、目を細める。  
あれは、ある人の病室にあつたものと同じものだった。  
そして、彼女の正体は 京子だった。

「やっぱり、あの連続殺人事件の犯人はお前だったのか、京子！」

俺は竹刀を構え、歩はなんとか立ち上がり、京子を睨みつけた。

「俺を殺したのは、お前だったのかよ！」

## 第十一話

「ノモブヨ、ヨシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチヤ、ティー、リブ  
フ」

どこかで聞き覚えのある呪文だ。

唱え終わると、京子の服装がコスプレ衣装に変わった。あれは、魔装少女の服装ではないか。

ここで俺は、瀬奈の言っていたことを思い出した。

『殺人事件？ そんなの、最近起きていませんよ』

京子は記憶操作で事件のことを誰も知らないようにさせたんだ。なぜ、俺が記憶を操作されなかつたのかは今は置いといて。

「歩、お前、動けないのか？」

「どうやら、そうらしい。なんでお前は動けるんだ？」

「俺だつてわかんねえよ」

さつきから動けない歩を掴み、京子から逃げようとするが、やつぱり魔装少女は速い。

一瞬で俺の前まで来たのだ。

「どうしてあなただけ、結界が効かないのですか？」

「さあなつ！」

刀を振るい、京子に攻撃するが防がれてしまう。

その瞬間、俺は歩を遠くまで蹴り飛ばした。蹴り飛ばした先は、いつの間にか來ていたハルナのもとへ。

京子は空いているもう一方の木刀で俺の横つ腹を殴る。

ギリギリ、木刀の軌道に合わせてバックしダメージを軽減したが、歩の元まで吹っ飛ばされた。

骨は折れていなが、ダメージはかなりくらひてしまった。

「しつかりしる！ 春樹！」

どうやら歩は動けるようになつたらしく。ハルナが結界を解いてくれたのだろう。

「で、アコム。こいつ誰？」

「俺を殺した魔装少女様だ」

「アコムの敵？ ……だつたら、あたしの敵だな」

今度はハルナと歩が京子に立ちふさがつた。

「へえ。ミストルティンはどうしました？ 素手で戦つつもりですか？」

京子は俺達の間合いを詰めよつとするが、歩が俺とハルナを掴みその場からと跳んだ。

「逃がしません」

のんびりとした声で俺達を追い、木刀で薙ぎ払おうとする。

「なめるなよ！」

俺は掴まれたまま刀で防御したが、やっぱり打ち勝てないので地面まで飛ばされるが、歩が着地し俺とハルナの負担を減らしてくれた。

「まだ動けるのですか？ それなら、一気に殺してしまいましょう」

京子は剣を上に掲げ、剣の先には巨大な火の球が現れた。火の球は、俺達に向かつて飛んできた。

今動けるのは俺だけ、ハルナは氣絶しているし、歩は着地に失敗したのか、うまく立てないでいる。

「ああ、もうっ！ くそっ！」

歩とハルナを持ち、火の球が当たらない所まで飛ばした。

「春樹！」

歩の叫ぶ声が聞こえる。ああ、なんでこうなるんだか。ここで俺は死ぬのだろう……。

後悔はしていない。やるだけのことはやつたんだ。でも、できるならもう少し人生を楽しみたかったなあ。火の球は俺の目の前まで飛び、爆発した。

「これで一人目ですね」

「春樹――！」

歩の叫び声が聞こえた。

「ってなんで聞こえるんだよ！ 俺、死んだんじゃないのか？」

「あれ？」

「なんで生きているんだ？」

しかも、俺は何もダメージをくらっていない。

“どういうことだ？

京子を見てみるが、彼女も驚愕していた。

「なんで……、生きているんですか。あなた、まさか人間なのに魔法抵抗力が高いのですか！」

何言つてんだ？ 魔法抵抗力？ なんだそれ？

「（じ）く稀に存在する魔法抵抗力。それは高度な魔法も効かないと、昔聞いたことがあります。まさか、あなたがそのような能力を持つていたとは」

後ろを振り向くと、セラが木の葉の剣とチェーンソーを持ってやって来た。

「セラフィム、来たのか！」

「ヘルサイズ殿に言われて加勢に来ました。とにかく、あなたが生きていてよかつた」

俺に向けて嬉しそうにほほ笑んだ。

セラは俺を掴み、歩の元まで向かう。今日の俺つて、掴まれてばつかじやないか？

ハルナも目を覚ましていた。

「歩、敵は人間 ですか」

「心配するな。あれは人間の皮を被つたバケモンだ」

歩がセラに言う。そういえば、吸血忍者つて人間を殺せないんだつたな。

歩もうまいことを考えるなあ。

「あれ？ その田……私と同じじゃないですか」

「おこおい、今度は田が赤くなつたぞ。彼女は吸血忍者なのか？」

「知りません。私はまた、別の力を感じます」

確かに、セラとは雰囲気が少し違う。

そして、セラの言つていた別の力が現れた。

それはメガロがよく吹く紫色の風だった。

今度はメガロの力かよ。

「では、こきますよ」

京子は巻きを出しきた。まためんどくさいものを……。

「いじなつたら、歩、とつとと変身しろー。」

「ぐつ！ やつぱり、しないとダメ？」

「いいから、しゃがれ！ みんな死ぬぞー！」

「ああーもつ、分かつたよー！」

俺は歩を説得せらるのに成功した。

「ノモブ田、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチヤ、ティー、リブ  
「」

歩が光だし、その中から出てきたのは、やつぱり変態だった。

「こつ見てもその姿は変態ですね」

「うん、変態だな」

「とつとと消えろ、このクソ虫」

「春樹のが一番傷つくわ！」

「相川さんにはそんな趣味があるとは知りませんでした、変態！」

あ、相川が崩れた。なんとか立ち上がりセラと歩で京子に向かった。歩は竜巻をうまく避け、京子の前まで向かった。

チーンソーと木刀でつばぜり合にになるが、歩はチーンソーを捨て、京子に抱きついた。

そして、セラが歩ごと京子の心臓を刺す。

京子はそのまま崩れ落ちた。

「終わったよ、うですね」

セラが俺に近づき、そのまま俺の胸に飛び込んだ。

「セラー。」

セラの後ろを見ると、背中に剣が刺さっていた。

「一回死んでしまいました ですが、残念です」

そこには死んだはずの京子が立っていた。

## 第十一話（後書き）

少しオリジナル要素を入れてみました。  
別に春樹はチートではありませんので。

「セラフイム、大丈夫か！」

「ええ、一応大丈夫です」

セラの無事を確認してほつとする。

「おいおい、死んだはずのになんで生きてるんだ？」

俺は京子に聞いてみる。

「私はゾンビではありますんが、あと十回ほど死ねますから」

「まさか、生体の宝珠！」

「なんだ、生体の宝珠つて？」

歩が何かに気が付いたハルナに聞く。よく見ると、歩はすでに変身が解けている。

「生体の宝珠は死んだものを生き返らせるアーティファクトだ。生きているものに使うと一度だけ死を無効にしてくれる

「なんだよそのRPGとかにありそうなヤツ」

思わずツッコんでしまった。

「なるほど……だから人間を殺しまくっていたのか。殺した人間を魔力に変えて宝珠を作ったのか」

「相川さんつて意外と詳しいんですね。変態のくせに」

また歩が落ち込んだ。いいかげん慣れろよ。

「やっと来てくれましたか。お待ちしていましたよ」

京子が後ろにいる人を見ている。後ろを振り向いてみると、そこにはユーが立っていた。

やがて、俺の前に行き、そして歩の前まで行った。

京子は火の球をユーにぶつけてくるが、それを片手を払うだけで消してしまった。

やつぱりユーって強いのか？

そんなことを思つていると、京子は次にユーの元へ向かい剣を縦に振つた。

ユーはまた片手で防御するが、すぐに膝を崩してしまつた。

京子は不思議がつており、ユーのプレートアーマーを蹴り飛ばした。

あれ？ ユーって強いのか？

疑問に思つてしまつた。

「……なるほど。その籠手は、藤島さんと同じようになに魔力を消し去る効果があるようですね。ですが、扱う人間が弱すぎます」

京子が呆れています。ユーのほうはハルナからチエーンソーを奪い、誰にも聞こえないように何かを唱えていた。

まさかユーまで変身するのかよ。

予想通り、ユーはプレートアーマーの内側に例のコスプレ衣装が着られており、魔装少女になつた。

チエーンソーを持ちながら、京子に突つ込んだ。

「……そうか、ハルナの魔力を奪つたのは俺じゃなくてユーだつたのか！」

歩が謎が解けたようにユーのほうを見て言つた。

ユーは魔装少女になつても京子の足もとに及ばず、また俺達のほうまで吹つ飛ばされた。

「ユー、俺も一緒に

『逃げる邪魔』

ユーは地面に書き、俺達に見せた。

『せめて 動くな 絶対』

最後にそれを書き、また京子の元に向かつた。  
もしかしてユーは……。

歩はユーをほおつておけないのか、ユーの元まで行こうとするが、  
俺とセラが歩を止める。

「やめろ。お前が言つても邪魔になるだけだ

「どうこいつとなんだ？」

「春樹の言つとおりにしなさい。ヘルサイズ殿の力を忘れたのです  
か？」

「それがなんだって 」

やつと歩が俺とセラの言つたことこなづく。

そう、ユーの能力は言葉を聞いた者は言葉通りになる。  
つまり、ユーは京子にこいつの言つだらう。

死んで と。

いきなりユーの場所が光りだした。さつと言葉を発したのだらう。

「あでつー。」

空からユーが降ってきて、俺の頭に直撃した。しかもプレートアーマーを付けていたのでものすごく痛い。

「大丈夫か！　おい！　ユー！」

歩が必死で呼びかける。脈はあるが、目は覚まさない。

「まだ死んでいませんよ……その人の魔力を手に入れるために、わざわざこの姿で戦つたのですから」

耳に血を流した京子が近づいてくる。

「いいつ、まさか耳を切ったのかよ。

京子は自分の心臓を刺し、また復活した。その時の傷もなくなっていた。

「さあて、パーティーを続けましょ！」

笑う京子にかなり腹が立ってきた。

みんなも怒りを表にしており彼女に向かって

「みんな、行くぞ！」

俺が叫び、みんなが京子に突っ込んだ。

歩とセラとハルナが先陣をきり、攻撃した。

しかし、三人は吹き飛ばされるが、俺の存在に気づき、攻撃を防御する。

京子は俺を押し返そうとするが、あえて俺はここで一步引き躲す。勢いがついたせいで前のめりになつた瞬間に俺は京子の背後に回り込み、全力で斬る。

「藤島流 風車！」

京子は体制を崩しながら復活するが、俺は復活した瞬間にまた斬りつける。

「お前が復活する瞬間に切る！ さて、あと何回切れば死なんだ？」  
「たかが人間なんかに……」

また斬りつける。そして、京子のコスチュームが消え、黒マントだけの姿になった。  
どうやら魔力が切れたのだろう。

「あ……ああ……」あああああ！

京子は俺から逃げる。だが、今度は歩が京子の前に立ちふさがる。  
「……ありがとう。お前に殺されたおかげで人生が変わったよ」

京子は悲鳴すら失い、ただ歩の言葉を聞いている。

「だから、今度はお前の人生をえてやる」

歩は全力のパンチを京子に放った。盛大に吹っ飛び、地面に着いた時には彼女はもう動かなくなっている。

「終わりましたね……」

セラが傷を抑えながら俺の元によつて来る。

「大丈夫か？」

「いいえ、しばらく歩けそうありますよ」

「しょうがないなー」

俺は後ろを向いてしゃがんだ。

「おぶつてやるよ

「しかたないので……あなたの言葉に乗ります」

俺に体重を預ける。背中にかかる胸の圧力を感じながら立ち上がる。隣では歩がハルナをおぶつている。

俺達はユーの元に戻った。

「「ユー」」

「ヘルサイズ殿」

「おーい、根暗マンサー」

ユーは俺達の声を聞き、皿をゆっくりと開ける。

「なんだ、生きてんじやん

ハルナは残念そうにしていたが、アホモをピロピロ動いてたので本当は喜んでいたのだ。

『終わったの。』

「ええ、春樹と歩がやてくれましたよ

セラが言つと、ユーは満足してくれたかのよつた表情に見えた。

歩は京子を見たが、彼女はまだ逃げようとしてるので、最後のとどめの一撃を繰り出そうとしている。

歩は拳を振り上げ、京子に下ろそうとしたが、突然誰かが現れ歩の腕を掴む。

「おい、止めるなよ。こいつは生かしておく訳にはいか

歩は後ろを向いていたので気が付かなかつたが、振り向くと声を失つた。

「あなたがアコムさんですねえ？ ウチの生徒に何するんですー？」

「だ、大先生」

ハルナが動搖していた。  
この女が大先生？

## 第十一話（後書き）

**風車**　相手の刀を押さえ、押し返そうとする相手の力を利用して一步引き、前のめりになつた瞬間に背後に回り込み斬る技。

歩は大先生につかまれた腕を振りほどけようとするが、彼女の力は強くてほどけそうもない。

「大先生、腕を離してくれ。京子はこの世界でやつてはいけないとをしたんだ」

「んー、信じるにはあ、材料が少なすぎますねえ」

大先生は小さなポケットから日本刀らしきものを取り出し、歩を斬りつけた。

「楽しいダンスだった」

突然京子から男の声をだし、歩と大先生を吹き飛ばした。

「そんな……なんで……」

声を出したのはユーだった。俺はユーを見ると、その声に怯えている。

「元氣そうで何よりだ、ユークリウッド。まだ何もあるつもりはなから安心してくれ。

京子は霧に包まれ、この場から立ち去りかかる。

「では、歸る。また会いましょう」

「じつやう、歩さんが正解のよつですね。逃がしませんよおー。」

大先生は京子を追つて消えた。歩も追いかけようとするが、ユーに抱きつかれて、動けなくなつた。

ユーは震えてる。きっと、追いかけるとマズいのだろう。

「ユー、さつきのアイツは誰なんだ？」

俺が質問すると、ユーはしゃがんで文字を書く。

『あれは　あの霧は　私が消滅させたはずの』

『ゾンビの力』

あの日から数日が経つた。

大先生は俺たちの話を信用してくれて、今では京子を捕まえるために捜索を続けている。

これで、誰にも知られぬまま連續殺人事件が終了したわけだ。

そして今、俺と瀬奈は歩に呼ばれ一緒に来ていた。

「おじやましまーす」

早速居間まで行くと、テーブルの上にはなぜか石鹼が山積みされていた。

「来てくれて助かった。実は、プリンを作りたくてだな  
「あー、だからコレを買ってきてくれたのか

袋の中身を見る。中には卵や牛乳など。俺には何を作るのか分からないので、歩の言つとおりにしていた。

「セラ。」  
「セラ。」

「ええ、」  
「ははは」

セラと瀬奈は友達のようにな接している。

「瀬奈もセラフイムも仲がいいな」

俺は素直に感想を言った。

「春樹、今まで気にしていましたが、あなたはセラフイム」と呼ぶのですか」

「え？ だつて『瀬奈』と『セラ』って呼び方が似てるじゃん。だからお前のことをセラフイムって呼ぶんだよ」

「セ、セラフイムだったのですか」

セラがぽつと息を吐く。『ううううう』

「ほら、アコムー。わざわざじやんじやんバリバリ作るやー。」

ハルナが急かしていく。どんどん作るつもりなんだよ……。

「では、私が牛乳を唐津焼に」

「は？ 唐津焼？ 牛乳で陶器でも作るつもりかよー。」

「よし、セラ。お前は風呂でも沸かしてー」

セラは歩の言葉にすね始めた。

「なあ、セラフてもしかして……」

「ああ、ものすごく料理が下手くそだ。以前、俺が食べたとき、死にかけた。お前に『助けて』ってメール送つただろ」

ああ、あの時のメールはそういうことだったのか。

「ま、みんながいれば、さすがのセラフも変なものを入れないだろ？ 一緒に作つてもいいんじゃないか？」

「お前が言つなら別にいいが」

セラフはパツと表情が変わり、俺の両手を掴んできた。

「あつがとうござりますー！」

「お、おつ

「むつ」

少し照れくさくなり、瀬奈のほうに顔を向けるが、何故か彼女はムスッとしていた。

『歩 プリンを』

『ユー、プリン作れるのか？』

『まず 牛乳を唐津焼に』

『よし、お前は食器係な』

ユーの危ない行動を歩がなんとか止めてくれた。

ユーも料理が苦手なのか。

「どうやるんだ？」

中身が入っているボールを前に、いきなりまくってしまった。

率直に言おう。俺も料理が苦手だ。

セラよりはひどくないと自信はあるが、それでもプリンを作れるほどの技術なんでものはない。

「まずは、泡立たなこつくり回すんですよ」

瀬奈が見本を見せてくれる。言われたとおりにしてやつてみるが、力加減が難しい。

「いりやむことですよ」

瀬奈は俺の後ろに立ち、俺の手と一緒に泡立て器を持ち、かき回してくれる。

背中に瀬奈の豊満な胸が当たり、正直つまづけ回せない。

「あ、セラさん。何入れようとしてるんですか！」

セラを注意しに、俺から離れる。ひとまずホッとする俺。順序はすでにオーブンで焼く過程までこぎ、よつせへ終わつたと一息つきにテーブルへ向かう。

ユーも座つており、のんびりとしていた。歩も休みに来たのか、ユーの隣に座つた。

「なげ、ユー。お前はこの生活をどう思つてるんだ？」

『嫌いじゃない』

ユーもなんだかんだでこの生活を氣に入つていい感じ。それを聞けて安心してくる歩。

しばらくすると、オーブンが焼き終わった音を出した  
さてと、プリンが焼けたんか。  
俺はプリンが出来上がっているのを見に行つた。

## 第十一話（後書き）

やつと一巻分が終わりました！

このまま一巻分も毎日投稿していくらしいです。

## 第十四話（前書き）

2巻目がようやく始まりました。

七月からは夏休みだ。

だが、それを楽しむためには期末テストで赤点を取らないようにしなければならない。

俺の成績は、はつきり言つてヤバい。下の上といつたといひだらう。赤点なんて、中間テストとかでよくとつてこる。なんとしても赤点をなくして、夏休みをエンジョイしたい。

「……とこつわけで、教えて下下さい。瀬奈様」「別にいいですよ」

さすがは優等生。お前がいなかつたら夏休みはずっと学校へ行つていただろう。

「よし！ 早速帰つて一緒に勉強しよう

俺は瀬奈の手を引いて一緒に帰つた。

帰り際に教室の人からは「リア充、死ね」だの不快な言葉が飛び交うが、そんなのを気にしていたら時間の無駄だ。

勉強会は俺の家で行われた。

俺は明日の教科を教えてもらい、出でつたところを丸暗記した。

「春樹君、やればできるじゃないですか」

瀬奈が褒める。どうやら俺は、やればできるやつらしい。

そんなことをずっとやつていると、既に夜の九時を過ぎていた。

「瀬奈、そろそろ帰つたほうがいいんじゃないかな？」

「そうですね。親もそろそろ心配しますし……」

瀬奈は名残惜しそうに言った。

俺たってそもそもできるなんていのテスト期間は俺に勉強を教えてほしい。

そういう、ハルナつて天才だつたんだよな。

俺は歩にメールをして、急いで家まで戻った。勉強道具を持ち、歩の家に直行した。

「よう、勉強を教えてくれ！」

チャイムもせず、居間に入ると、そこには勉強を黙々やつている歩と、偉そうに立っているハルナ。歩の隣で勉強を見ているゴーに、テレビを小音量で見ているセラがいた。

「よう、  
来たか」

歩は手を止め、じちらを見る。

「なんだ？」刀のも天才美少女ハルナちゃんの授業を受けに来たのか？」

「ああ、頼みます。教えてください天才美少女ハルナちゃん」

もう、なりふり構つていられない。赤点を避けるためならこんなこ

とだつて耐えてやる。

「しゃーなしだな。早く座つて聞けよな！」

ハルナ先生の指示に従い、勉強を開始した。  
歩に聞いたところ、最初は訳の分からぬことを言つていたが、ユ  
ーのおかげでまともになつたらしい。

「セラフィム、お前地理とかは得意か？」

「ええ、数学とかはダメですが、古文と地理くらいな  
「だつたら、明日教えてくれ。明日も今日と同じ時間に来るから」

「？ どうしてもつと早く来ないのでですか？ 早くてもかまいませ  
んが」

「それまでは瀬奈に教えてもらつんだ。あいつも教えるのがつま  
けど、時間があるからな」

「……わかりました。明日、教えましょう」

「サンキュー！ 助かっただぞ、セラフィム！」

お礼を言つと、顔が赤くなるセラ。そんなに恥ずかしくなるよう  
ことを言つたつけ？

とりあえず、今田はハルナ先生の授業を受けることにした。

ヤバい、完璧だ。

テスト当日、数学のテストは絶好調だつた。

まだ二十分も余裕があり、見直しも大丈夫だつた。

これも瀬奈とハルナ先生のおかげだな。

歩の家では意外にも、瀬奈とハルナが言つたテストに出そなとこ  
ろが偶然一致して、同じところをやつたくらいだつたので、充実し

た勉強だつた。

残りのテストも、順調に進んだ。

「帰るうぜ、瀬奈。今日も教えてくれるか？」

「はい、私は大歓迎ですよ」

さすがは瀬奈。寛大でいらっしゃる。

靴箱まで向かうと、そこになぜか人だかりができていた。

「セラフィム？」

「春樹と瀬奈ですか。歩の教室はどこですか？」

「ああ、それなら俺と同じクラスだ。案内しようか？」

「ええ、お願ひします」

俺と瀬奈は、教室に戻ることにした。

廊下を歩いていると、ものすごい視線がセラに集まっている。俺には殺意のこもつた視線が集まつてくる。

セラはそれでも凛としており、俺の後をついてくる。

歩の元まで案内すると、織戸が興奮してこちらにやって来た。

セラは織戸を「ミ虫を見るような目で見た後、歩の元へ向かつた。

どうやら、ハルナから弁当を預かつて来たらしい。

結局、歩とセラ、俺、瀬奈の四人で帰ることになった。

歩はゾンビなので日差しに弱く、セラに引きずられて帰る。

瀬奈は歩を心配そうに見ている。

「気にするな。歩はドMなんだ」

「えつ、そつだつたんですか？」

「ちげえよ……。俺は太陽に弱いんだ」

引きずられたまま、弱弱しい声でツツコむ。

そのまま歩達と別れて、俺の家に着くと、早速瀬奈と勉強を開始し

た。

一田田は国語と地理なので、そこを教えてもらつた。  
黙々と勉強をしている中、突然チヤイムが鳴りだした。

「はい」

俺は扉を開けると、そこにはセラがいた。

「どうしたんだ？」

「勉強を教えにきました」

「え？ だつて勉強は九時からじや」

「それだと短すぎますので、私が早めにきました」

別にいいかと思い、セラを家にいた。

「こんばんは、セラさん」

「瀬奈も元氣そうで」

なんだか、セラが来て空気がガラリと変わった。

「瀬奈。あなたはもう帰つていいですよ。親が心配するでしょう」

「大丈夫ですよ。今日は泊まるつて言つておきましたので」

「あれ？ そうだけ？」

「はい、言つてませんでしたか？」

言つていない。そう断言できる。

だが、一人の先生に教えてもらえるのは結構いいかもしれない。

教えは一人ともうまかつたので、  
かなり身に付いただろう。  
明日のテストも楽しみだ。

## 第十五話

「田田、二田田と順調にテストは終わり、最終日もなんとか終わった。

瀬奈とセラがつきつきりで教えてくれたおかげだ。

テスト期間はほとんど寝ていなかつたので、とつとと帰つて寝ようつと思つた。

今、俺は一人で帰つている。家に向かつている途中、セラが屋根の上を跳んでいるのが見えた。

「おーい、セラファイムー！」

俺の声に気づき、跳ぶのをやめて「ひりに来た。

「春樹、実は歩とハルナがメガロと戦つてるので加勢しに来たんです。あなたも来ますか？」

「ええー、別にいいよ。早く寝たいし」

「そうですか……来ないのですか……」

そんなさびしそうな顔をするなよ。俺が悪者みたいじやんか。

「しようがない。何処に行けばいいんだ？」

「この近くの住宅街の裏です」

なんだ、意外と近いじやん。

「春樹、武器はどうしたんですか？」

「京子の戦いでスペアもなくなつたから、俺戦えないと」

「心配しないでください。ござとなつたら私があなたを守ります」

頼もしい言葉を聞きながら、目的地まで着いたが、既に戦闘は終了していた。

歩とハルナだけでなく、もう一人誰かがいた。  
そいつは、何故かとんこつラーメンを持つており、とんこつスープがあちこちに散らばっていた。

「セラフィム！ ひつさしぶりだなー。元気にしてたか？」

そいつはセラの元にやってきて、馴れ馴れしそうに背中をバシバシ叩いた。

セラは無言でそいつの足を払い、腕を固めた。

「近寄らないでください」

セラは厳しい言動でそいつに言った。

近くで見ると、よく見たら俺達と同じくらいの少女だった。

「歩、大丈夫か？」

「春樹まで来たのか。俺もハルナも大丈夫だ」

変態の服装のまま、俺に近づいてくるので少し離れた。

「で、コイツは誰なんだ？」

「名はメイル・シュトローム。吸血忍者ですが、私とは敵対している派閥の人間ですよ」

俺の問いに簡潔で答えてくれるセラ。

「ってなんだよ、メイルシュトロームって。RPGに出てくる技名じゃん！」

そんなツッコミは置いといて、その派閥というのは、吸血忍者の頭領をヨーの力で蘇らせるための派らしい。

どうやらセラの所属している派閥が保守派。メイルとかいう少女が革新派だという。

「アユム、メガロも倒したんだし…… そろそろ帰る」

「おい、大丈夫か？」

「触るな！」

歩の手助けに反発するメイル。そりや そうだろ、こんな服装だしな。  
俺の隣でハルナが歩に話しかけるが無視されてしまう。

「お前、アリ田だよつー。」

歩の胸倉を掴むメイル。歩も負けずに言い返してきた。

「俺は高校生だ。お前はセーラー服だよ。」

「馬鹿にすんなつ！ 俺だつて高校生だつつーの！」

そんなくだらない口げんかをしている中、ハルナが無視されたこと  
にキレて、歩に近づいた。

「アユムのバカっ！ あたしを無視するなよな！」

歩の背中を押し倒す。そのせいで、メイルも巻き込まれてしまい歩に押し倒される形になつた。

「五」

思わず噴いてしまった。なぜなら、歩とメイルが

キスをしてしまったからだ。

固まつて いる歩を、ハルナが蹴り飛ばし、俺が蹴り上げ、セラがかと落としで地面に沈めた。

今、俺達はうとんこつスープでメガロを倒す対策を教えてもらつために、メイルに秘密基地を案内させてもらつて いる。ちなみに、ハルナは歩の衝撃シーンを見てから、逃げるようにしてどつか行つた。どうしてとんこつスープがメガロに効くのだろうか。かなり気になる。

廃ビルに到着し、中に入るとそこには十人程度の吸血忍者がいた。少し歩くと、大きな機械が目に入った。どうやらこれは、とんこつスープを降らせるための装置らしい。

「くだらないですね。ではこれで失礼します」

セラはここに居るのがあまりよくな り よりで、とつとと帰りたいらしい。

ここは敵対している派閥の基地だし、帰りたい気持ちもわかる。

「セラファイム。なんだか、この装置をぶつ壊すつて言つて いる奴がいるんだが、知つてるか?」

「知りません」

「ほんとに?」

「はい」

メイルは、これ以上追及はせず、よかつたと笑つた。

「最後に、セラフイム、いつち派に来ないか？」

「嫌です。失礼します」

セラは先に外へ出て行った。

俺と歩もセラを追い、家に帰ることにした。

帰り道セラは不機嫌な様子で、早足で俺達の前を歩いている。

「あの装置つて、大丈夫なのか？」

今まで無言でいたので、何か話そつと想い、セラに聞いてみた。

「ええ、それなら私の上司が対処してくれるでしょう」

「ふーん。それならいいんだけど」

「いいえ、メイルのことで問題があります」

メイルと言われて、即座に歩を見た。きっと、あの時のキスのことだろう。

吸血忍者のキスは、婚儀の際に行つものだといつ。だから、あの時点で婚儀は終了したらしい。

しかも、吸血忍者は自分の感情よりも撃を優先してしまつほどのものだといつ。

「あなたはメイルを愛しているのですか？」

「いや、別に」

「だったら、どんなことをしても避けるべきだった」

また無言で歩く俺達。

「それじゃあ、俺が今ここでセラにキスしたら、俺と結婚するのか？」

「ええ、愛すると誓います」

俺の目を見て真剣に言つた。セラは顔が赤くなり、また背を向けた。たぶん、俺も顔が赤くなつているだろう。

「まあ、できればの話ですが」

セラは前を向きながら、俺に向つた。

## 第十六話

七月七日、今日は七夕だ。

一人暮らしの俺にとつてはどうでもいい日だが、今日は歩に七夕をやろう誘われて家に行くことになった。家に着くと、何故か外に笹が置いてあった。

「来たぞー」

居間まで行くと、何故かみんながポーテールにしながら短冊を書いていた。

「お前ら、何の真似だ?」

「いいから、刀のもやれよな!」

ハルナから強引にゴムを渡される。

だから歩は俺を誘ったのか。後でシメる。

みんなが俺のほうに視線を向ける。まさか、やらなくちゃいけないのか?

みんな、うんと頷いた。

「しょうがない」

髪は短いので、歩みたいに小さくしか結えない。

「んで、お前らは何をお願いしたんだ?」

テーブルの上に置いてある短冊を見てみると、そこには奇妙なもののが書かれていた。

『福神漬けの海に入りたい　　ゴー』

『この世の気持ち悪いものが根絶されますように（ゾンビ等々）セラ』

『地球がゆで卵になりますように　　ハルナ』

ツッコみたいが、なんとか堪えた。

「勝手に見んなよなつー！」

ハルナに短冊を取り上げられてしまった。  
しおうがない、俺も何か願い事を書くかな。

『ゾンビが滅亡しますように　　春樹』

「お前、絶対にふざけてるだろー！」

「春樹、いい願い事ですね」

「セラまでひどくないすか」

ギヤグはもうやめといて、まじめに書いておいつ。

『何事もない、平和な生活　　春樹』

これが一番無難だろー。

ハルナ達に見られないようにしながら、笹に短冊をつるした。

この後、ハルナが訳の分からぬ儀式を行い、それなりに楽しい夕を過ごせた。

七月十日、いよいよテストが返つてくる。

一時限目が始まる前、顔の知らない女性が俺を訪ねてきた。

「藤島 春樹だな」

「そうだけど」

「話は聞いているな。これが例のモノだ。相川 歩という者に渡してくれ」

「はあ……」

彼女は俺にメガネケースを差し出してきた。

それをどうして歩に渡すのかはよくわからないが、とりあえず渡せばいいのだろう。

名前を聞こうとしたが、彼女の携帯電話が鳴り、聞ける状況じゃなくなつた。

「私だ。 そうか それがどうした? …… そんなことへりい自分で判断しろ! 痴れ者がつ!」

携帯を片手に、どこかへ行つてしまつた。  
それにしても……このメガネはなんだ?  
なんとなく黒縁のメガネをかけてみる。

「春樹君、おはよう!」れこまく

「ああ、おは ぶつ!」

瀬奈にあいつをしようとして彼女を見たが、なんと下着姿だったのだ。  
慌ててメガネを取り外すと、瀬奈はちゃんと制服を着たままだ。

エロメガネかよつ!

心中でツッコミを入れた後、数秒考えてからもう一度メガネをかけてみた。

俺だって男なんだ。女性の体も気にはなる。

「？」

瀬奈は俺の様子に首をかしげている。

瀬奈の体は、何もしみや傷などのないきれいな肌だった。そして、上下とも下着が黒だったのだ。彼女の大きな胸が強調されるような感じのブラだ。

「いいつ、意外とエロいのか？」

これ以上はマズイと思ったのでメガネをはずす。

瀬奈は俺を不思議そうに見ている。

「春樹君、大丈夫ですか？」

俺の額に手を伸ばす瀬奈。俺はさつきの光景を思い出してしまう、瀬奈から離れた。

「い、いや……大丈夫だから……心配すんな……」

瀬奈は安心したのか、自分の席に戻った。

はあ……と、ため息が漏れる。

「今のうちに渡しておくか……。」

あのエロメガネはちょっと名残惜しかったが、歩にこのことを簡潔に教えて渡した。

放課後になり、もう夕日が沈みかけている頃だ。

今日は瀬奈に誘われたので、一緒に帰ることにした。

「今日は、夕食食べに来ますよね」

「あ、ああ」

「今日は私も作りますから期待してて下やー」

「そ、そりだな」

今日の俺は、瀬奈を見ると朝のことを思い出してしまい、つい言葉が濁つてしまう。

だが、もう一つ驚いたことがあった。

吸血忍者のメールがこここの生徒だったらしい。なんでも、高校では吉田 友紀という名前で通つており、織戸からはトモノリと呼ばれているそうだ。そのせいで、歩もトモノリと呼ばれるようになってしまったとか……。

突然、携帯が鳴りだした。歩からだ。

内容は、ゲーセンに来ないか？ だった。

ここからゲームセンターは近い。朝の煩惱を払つことはいいかもしない。

「瀬奈、一緒にゲーセン行かないか？」

「別にいいですよ」

進路をゲーセンに変更した。

ゲームセンターを少し回つてみると、みつけ歩を見つかる「」ができた。

「春樹、俺と勝負しろー。」

エアホッケーで勝負をしたいらしい。

「なんでこきなり」

「歩は私やハルナに負けたからですよ」

「ああ、なるほど」

セラが教えてくれて理解した。

よつするこ、歩はせめて一勝したかったのだろう。

「別にいいぞ」

台の端に立ち、勝負を開始した。

訳の分からぬ必殺技を言いながらホッケーを打つてくるが、そんなものは俺には効かない。

俺は、一度も点を取られずストレート勝ちだった。

歩がもう一度勝負と言つが、もう一度やつてやつても結果は変わらずストレート勝ちだ。

「残念だったな。頭の中が

「ぐはつー。」

一連敗して、とうとう崩れ落ちた。

「せつかく来たんだ。瀬奈も一緒に遊ぼうぜ」「はい！」

みんなそれじつOキャッチャー、アーケードゲームなどを楽しんだ。

「春樹君、一緒にあれを撮りませんか？」

瀬奈はプリクラの場所を指しながら言った。

「別にいいぞ」

了承すると瀬奈は喜び、俺の手を引っ張り中に入ることになった。写真を撮る瞬間にセラが現れ、三人で撮ることになった。

「どうしたんだ？」

「いえ、あなた達が入っていくのを見たので。ダメでしたか？」

「俺はいいけど、瀬奈は？」

「私も別にいいですよ」

瀬奈は嫌な顔一つせず、三人でプリクラを撮った。

「いやー、楽しかったなー」「そうですね」

みんなでゲームセンターを出る。俺は軽く伸びをする。辺りを見てみると、突然メガロが現れた。

虹色のウサギで、お馴染みの学ランを着ていた。

「「わざわざ魔装少女！」

メガロは攻撃をしてこない。攻撃しようとした構えている歩を見てただ叫んでいるだけだ。

「春樹君、あれは何ですか？」

「心配するな。ただの着ぐるみだ」

今は瀬奈がいるので、俺は早く帰らねばと思いつつ、セラに近づいた。

「セラファイム、とりあえず瀬奈を家に帰してからまた来るから

「わかりました。ですが、これなりの必要はないと思いませんが

「一応、念のためだ」

セラ達とひとまず別れて、俺は瀬奈を家まで送った。  
瀬奈の家まで着き、また歩の所まで戻らねばならなかった。

「悪い、一度家に帰つてからまた来るわ」

家に帰ると嘘をつき、急いでみんなの所に向かつた。

幸い、近くの公園で歩達と出合つた。

会つたのはよかつたが、歩達の前にいるのは京子だった。

「歩、無事か？」

「俺は大丈夫だ。だが……」

歩はしゃがみながらトモノリ 今はメイルか を見た。  
何かによつて衣服を引き裂かれている。

「お久しぶりですね、春樹さん」

「俺はお前に会いたくなかったがな」

またしてもこいつに会うとは……、俺もついてないな。

「道端でいろんなメガロが吸血忍者らと戦つていたが、あのメガロ  
はお前のせいなのか？」

「春樹、あれはメガロじゃない。メガロの偽物だ……」

そんなのはどうでもいいが、歩の様子が少しおかしい。

みんなを見ると、みんなが身震いをしている。そんなに寒かつたか？

……いや、違う！ これはあいつらの魔法か！

道路や建物が凍り始めている。これも京子の仕業か？

「やつぱり持つてるじゃないですか アリエル先生の魔装兵器を  
つー」

京子が驚きの声を上げた。彼女の足元も凍り始めたのだ。

おいおい、その兵器つていうのは無差別攻撃なのかよ。

俺は魔法抵抗が普通よりズバ抜けて高いらしく、寒さも感じないし、  
足元も凍らない。

だが、みんながヤバい状況になつてきている。

セラはどこかの屋根にに跳んだが、歩は完全に足が凍つてしまつて  
いる。

「ハルナ、お前だけでも」

「何言つてんだ！ アコムも早く逃げろ！」「くそつ！ もつト半身まで凍つているぞ！」

歩とハルナは、既に胸のあたりまで凍り始めた。セリフを見てみるが、彼女の足まで凍つている。

「くそ……！」

俺こはざひする」ともできない。なぜこいつはここののかさえわからぬ。

「逃げてつー

」「一の声が、みんなに響いた。

「あれ？」

気が付くと、俺は瀬奈の家の玄関にいた。

どうこうことだ？

俺の声が聞こえたのか、瀬奈が玄関までやつて來た。

「あつ、春樹君。一度夕食ができましたよ」「えつ？」

そういえば、夕飯は瀬奈の家で食べさせてもらひただつたっけ。

「早く早く

瀬奈に引っ張られ、そのまま夕食を「」駆走になってしまった。

用事があると直ちに早めに家から出た俺は、急いで歩の家まで行った。

「みんな！ 無事か！」

「おわッ！』

急にやつて来た俺にハルナがびっくりした。

「こきなり脅かすなよな、刀の」

「あ、ああ悪い」

「どうやらみんな無事だったようだ。』

『春樹 あなたは何処に飛ばされた？』

「実は『

瀬奈の家に着いたことを話すと、ユーはまた新たに何かを書いた。

『やつぱりあなたは魔法抵抗力が強すぎる だからあなただけ別の場所に移動した』

やつぱりあれはユーの仕業だったのか。  
なにあともあれみんなが無事で安心した。

もつ、帰るのがめんどくなつたので、『』で泊まる』とした。

## 第十八話

次の日の夜中、俺が寝ているときに歩から電話がかかった。

「…………もしもし？」

『春樹、今から墓地へ行けるか？』

「…………別に、行けるけど…………」

『なんでも、大先生がお前に渡したいものがあるらしい』

「…………何時に向かえばいいんだ？』

『十一時くらい』

時計を見ると、十一時半だった。

一体何を渡すのだろうか？

「わかった、今すぐ向かう」

電話を切り、軽く身支度をした。

「だあ―――― くせつ、ついてね――――！」

墓場に向かう途中、俺はメガロに追われている。竹刀も、あれ以来壊れたままなので今は手ぶらだ。曲がり角に曲ると、曲った先に誰かがいた。

「危ない！」

「え？…………きやつ――！」

そのままぶつかり、その子を押し倒してしまった。

「いて……、悪い、大丈夫か？」

その子の顔を見てみると、そいつは京子だった。  
周りを見てると変態姿の歩とハルナがいて、どうやら「ロード京子」と  
対峙していたらしい。

さつきから右手に柔らかくて妙な感触を感じたので、もしゃと思いつつおもおも見てみると、俺は京子の胸を揉んでいたのだ。  
京子は顔を赤くしており、今にも泣きだしそうだった。

「うおー！ 悪いー！」

彼女から急いで離れ、歩達の元へ向かった。

京子は立ち上がり、俺を怒りの目で見ていた。

「春樹さん、あとで覚えていなさい」

京子は最後にそう言い、何かを持つて去って行った。

「……えっと、何があつたんだ？」

歩とハルナは笑い出した。

話によると、京子が大先生に渡す魔装兵器を奪つたが、その中身はエロ本だつたらしく、そして俺と激突して現在に至る……。  
そんな話をしながら、墓場に着いた。

大先生は俺達に気づき、こちらまで来てくれた。

歩はエロ本が京子に奪われたことを話したら、笑い出した。

「アコムさん。いやらしき本が兵器なんて、どう使つねつもりなん

ですかあ～？ もう、アコムさんのエッチい

「大先生から預かつたものと違うんですか？」

「何處ですか～？ デコにも居ないじゃあないですかあ～

どうやら、歩の持ち物には魔装兵器はないらしい。

「もしかしてえ、偽メガロの大量発生は京子の仕業ですかあ？」

「ええ、本人が言つていました。気づいていたんですか？」

「メガロはあんなに弱つちくないですもの～。それにあの子は私の計画も知つて」

何かを言おうとしたが、咳払いでごまかす。

「あの子ならあ、私が魔装兵器を使つと考えそつですしそれを狙つてるならなつとくです～～」

歩達の話が全然わからぬ。ハルナもわかつてなさそつで、二人に馬鹿にされて拗ねている。

「では、私はヴィリエに帰りますねえ。アコムさんも～苦勞様でした」

「いあ、ちょっと待てえーーー！」

俺が大先生に向かつて言つ。

「あなたは確か、春樹さんでしたね。どうかしましたかあ？」

「どうかしたじゃなくて、あんたが俺を呼んだんだろ！ 何か渡すものがあるつて」

「ああ～、そういうえば忘れてました～」

そういうて、大先生は白衣のポケットから刀を取り出す。だが、大先生はなぜか手袋をつけて取り出したのだ。

「これをあなたに差し上げます」  
「はあ……」

刀を受け取る俺を見て、大先生は「やつぱり」と声を漏らした。  
「その刀は『花影血桜』<sup>かえいおぎくわ</sup> と言いまして、呪いの刀なんですよ」

なんですよってこと言われても、俺の体は大丈夫なのか？

「それは所持者の魔力を死ぬまで奪う呪いの刀。ですが、あなたの能力ならその呪いに打ち勝つことができるでしょう」

「ふーん。なるほど」

刀を抜いて誰もいない場所に刀を振る。すると、刀から衝撃波が発生し、墓石が割れた。

「…………」

言葉を失つた。

「その刀に宿つてゐる魔力は千年はもちますので、大丈夫ですよ」  
「えーっと……ありがとうございます」

春樹は新たな武器を手に入れた。  
俺は花影血桜を大事に持ちながら、家に帰つた。

## 第十九話

刀をもらつた次の日。  
時刻は放課後になり、俺は歩と一緒に帰つてゐる。

「なんでお前が来るんだ？」  
「いやー、この刀でもう一度セラファイムと戦つてみたいんだよねー」  
「あの刀ならお前が勝てるんじゃないのか？」  
「わかんねえぞ。セラファイムの力だつてあんなものじゃないと思うけど」

俺は大先生からもらつた妖刀 花影血桜を持つてゐる。  
誰とも戦うことができないので、夜にセラと勝負したかったのだ。  
歩の家に着くと、玄関でハルナが電話の受話器を持ちながら唸つて  
いた。

「何してんだ、お前？」  
「あ、アコムに刀の！ いつからそこにつ！」

話を聞くと、ハルナが大先生に謝ろうかと、今まで考えていたらし  
い。  
あのハルナが謝罪をねえ……。  
これには驚いた。いつもは自己中女のハルナが相手に謝ろうとして  
いるのだ。

「だったら、ゲーセンにでも誘つてみたらどうだ？」  
「うん！ それだつ！ 大先生なら、絶対喜ぶな！」

そう言つて、ハルナは大先生に電話を掛けた。

とりあえず、居間で待つてしようとユーと一緒にテレビを見ようとしたら、ユーがテーブルをトントンと叩いた。

『その刀 見せて』

「いや、それは不味いぞ。柄を掴むと魔力を吸い取られるらしいからな」

『私は籠手を着けてるから大丈夫』

どうやら、ユーの鎧や籠手は何か封印効果があるらしい。ってことは、この血桜よりも効果が上回るってことか？ ユーに渡してみるが、何も変化はない。

『すげいい刀』

「へえー、ユーもそう思うのか」

『これには膨大な魔力が入っている 今まで何人の人が死んだんだろ？』

『生々しいこと言つくなよ！』

ユーがボケたぞ。しゃべってはいながら、なんだか新鮮味がある。その時、上から一人の声が聞こえた。かなり大声だ。

二階へ行き歩の部屋まで行くと、歩とセラが喧嘩をしていた。

「おいおい、一体何があったんだよ」

「春樹、このメガネを付けながら手紙を見てください」

セラに渡されたものは、なんとエロメガネだった。

手紙のほうを見てみると、白紙だったの、メガネを付けて見ると文字が浮き上がりつて来た。

内容は、ユーの抹殺だった。

俺は無言でメガネを取り、セラを見た。

「お前は答えを見つけたのか？」

「はい。歩のおかげで吹っ切れました。私はこの任務を放棄します」

「お前なら絶対そう言うと思つたぜ」

俺は手紙を破り捨てる。

この任務を変更させるには、あの天候を操る装置を破壊すればいいらしい。

「お前と勝負したかつたが、とりあえずそれを何とかしようぜ」

ハルナが出ていった後に、俺達三人はあのビルに向かつた。

ビルの入り口に着くと、早速誰かが倒れていた。

中に入るとたくさんの吸血忍者が倒れていたが、全員何かで眠らされていいるだけだった。

やつと例の機械の所まで向かうと、機械の前で倒れている吸血忍者がいた。

よく見ると、あれはトモノリだった。

声を上げたかつたが、殺氣が背後から刺さつて來たので叫べなかつた。

「誰かと思えば、セラフィムか。何しに來た？」

振り向くと、そいつは以前俺にエロメガネを渡してきた学生だった。

「その天候を操る装置を破壊しに」

「それは困る」

「なぜ？」

「人類吸血忍者化計画を円滑に進めるためには必要だからな」

「今、何と言いましたか？ まさかその馬鹿げた計画が我々の派閥

から出たものだとは……」

「おいおい、私とやりあつつもりなのか？ 同じ保守派の吸血忍者だというのに」

二人の目が赤く染まる。

「歩、今は下がるぞ」

「ああ」

俺の言葉に従い、数メートルバックした。

「気の合つ話は酒を交わしながら、気の合わない話は 剣を交わしながらつ！」

二人の剣がぶつかり合う。

何度も剣を重ねているが、セラのほうが劣勢だ。

「秘剣、燕返し！」

「秘剣、燕尾返し」

また剣が重なり合つ。だが、女生徒の攻撃に敗れ、セラの胸元から血が出た。

「セラファイム、強くなつたな 二撃も耐えられるとは思つてなかつた」

歩には見えなかつたかもしけないが、俺にはしっかりと見えた。

さつきの四回目の攻撃でセラは斬られたのが見えた。

俺はセラが戦闘不能になつたので、セラの所まで向かつた。

「春樹、あなたじゃ勝てません……。早く逃げて」

「おいおい、俺がやられるとでも思つてるのか？」

セラに向かつて二コリと笑う。セラは顔が赤くなりそっぽを向く。

「さて、次は俺の番だぜ」

「はん、たかが人間が私にかなうなど」

まだ話途中に俺は花影血桜を抜き、ビルを少し斬つた。

斬つたと言つても、それはかなりの威力で、外が見えるほどだつた。

まさか、これほどまでの威力とはな……花影血桜。

女生徒は俺を驚愕の表情で見ている。

「貴様……、ただの人間じゃないな？」

「いいや、ただの人間だぜ。この刀はかなりの魔力が入つていいらしいんで」

もう一度刀を振つた。丁度いい重さだ。

「いいだろう、貴様の命もここまでだといふことを思い知らせてやる！」

俺に向かつて突つ込んできた。

「貴様、なかなかやるな」

「吸血忍者つてのはみんな強いんだな」

剣が何度も重なり合つ。

女生徒の攻撃は見えるので、攻撃を受け流すことは簡単だ。  
その瞬間に、彼女のスキを見つけて反撃した。

「見つけた！ 藤島流 畏綱！」

スキにめがけて素早い突きを繰り出した。

女生徒が下がつたと同時に、刀から斬撃を出して相手を休めさせな  
い。

「くつ！」

俺は彼女に突つ込み、斬りつけようとするが、彼女は背中から翼を  
だし、空中に避けた。

「おい、するいぞ！ 降りて戦え」

「ふん、貴様に勝てればそれでいいのだ」

空中から斬撃を飛ばしていく。

俺も斬撃を飛ばし、攻撃を相殺する。

だが、最後の一撃も相殺させようと思ったが、体が疲れてしまった  
ので血桜で防御した。

攻撃を受け止めると、片膝をついて休憩する。

マズイ、俺の体力もそろそろ限界だ。

俺は人間なので、体力も吸血忍者より少ない。なので、女生徒はまだまだ戦える状態だ。

「ふ、どうやらお前の体力もここまでだな」

「やっぱり分かつたか？」

「安心しろ。撃により命は助けてやる」

剣を構える女生徒。俺は血桜を鞘に納め、目をつぶった。

「なんだ？ 春樹のやつ。勝負を諦めたのか？」

「あなたの目は節穴ですか？ あれは居合ですよ」

歩とセラの声が聞こえる。集中しているせいか、はっきりと聞こえた。

「ふん、居合とはな。さつあと終わらせてやるー！」

こちらに向かつて走る音が聞こえる。

「まだだ。もう少しだ。

音が消えた。きっと足音を消したのだろう。

ここで慌てたら負ける。相手を感じ取るんだ！  
かすかに風を切る音がした。

目を閉じながら攻撃を避け、俺は目を開きそこに刀を振った。

「藤島流 鏡心！」

渾身の一振りだ。だが、浅かつた。

女生徒を斬ったと思ったが、彼女の姿が丸太になつた。

「やられた、変わり身かよ！」

背後から殺氣を感じ、俺は急いで反転し、攻撃を防いだ。

「ぐあつ！」

が、力負けして壁に激突した。

力がない。俺の負け……か。

女生徒は俺が戦闘不能になつたのを見ると、剣を下した。突然歩が俺の所に行こうと、物陰から飛び出しが、女生徒が剣を投げ歩の首に刺さつた。

「いいつ……歩がゾンビじやなかつたら死んでたぞ……。撃破つてるじやん。

「ん？ 今ので死なないのか？ どういう仕組か」

「とんこつスープの雨を降らせるとか、人類吸血忍者化計画だとか、ユーを殺せとか、吸血忍者はどうしてそう、まとまりがないんだ？」「そこまで思考すればわかることだろ？ 今、吸血忍者には絶対的な指導者、決定権を持つ者がいないからだ」

女生徒はそう言い、歩に何かを投げる。

歩はそれを直感で避けたのか知らないが、さつきまでいた場所は穴が開いていた。

女生徒が濡らした手で水滴を飛ばしたらしい。

「なるほど、だからユーに頭領を生き返らせてしまつといとつー！」

歩が何かを投げる。狙つた先は女生徒ではなく、あの機械の方だ。爆音が鳴り響いた。どうやらあれは、爆弾のようだ。だが、機械は破壊されず、隣の壁に穴が開いた。

女生徒があの瞬間にはじいたらしい。

「残念だつたな。この装置は壊させない。私が頂いていく

女生徒の手に、何かが集まり、歩に放つた。

「とくと味わえ 飛剣、百鬼漸殺」

歩の体に次々と水の剣が刺さっていく。  
俺もやつと力を取り戻し、歩の元へ向かおうとするが、突如、ビニ  
からか声がした。

『最終詠唱を確認した。目標地点の重力を10Gに変更する』

その声と共に、歩の周りの水が地面に打ち付けられた。  
誰がやつたのか見渡してみると、それをやつたのはトモノリだった。  
しかも、何か守護霊みたいのが憑いてるし……。

「スタンドかよー」

思わずツッコんでしまった。

まあ、このくらい声を出せるならまだ大丈夫だらう。  
トモノリに憑いてるのは、右半身が人間、左半身が炎で出来てい  
る「メートル近い男だ」。

男は攻撃してくる女生徒を、いとも簡単に倒した。女生徒は壁に打  
ち付けられ気絶している。

それから男は訳の分からぬ呪文を唱え、あの装置を破壊した。

「友紀、お前どうしたんだ？」

歩がトモノリに聞いてみるが、返事はなく、返つてくるのは男の声  
だった。

『残存する敵の排除を開始』

おいおい、俺達まで殺すつもりかよ。

「歩！ 何故戦わないのですか！ 彼女はこのような能力を持ち合  
わせていません」

あれはトモノリの能力とかじゃないのか？

もしかして……あれが大先生の言つていた魔装兵器なのか？  
あの時、大先生は魔装兵器が『居ない』と言つていた。  
つまり、魔装兵器は人に憑いていたということになる。  
今の男が魔装兵器つてこともありえる。

「しょうがない」

俺は男に向かつて斬撃を放つ。

攻撃にぐらついて、トモノリから意識が戻った。

「あい……かわ。 たす 」

また言葉が途切れ、意識を失った。

「凍てつく氷を解き放て」『第一詠唱を確認、術式解放』

また変な呪文を唱えた。

「其は神々の息吹さえも吹雪へと変えるだらつ」『第一詠唱を確認、  
冷却準備完了』

「みんな！」こから出るぞ！』

俺が叫ぶと同時に、

「駆け抜ける、アブソリュート・フーンリル『最終詠唱を確認した、氷結を開始する』

一瞬で部屋中が凍つた。

この現象は、ゲーセンの時と一緒にだ。

やっぱり、あの男は魔装兵器だったんだ。

どうすればいいのかと考えているときに、歩がトモノリの前まで行き、彼女を抱きしめた。

「やめてくれよ…トモノリ…」

その瞬間、部屋の氷は解けて男は消え、トモノリは意識を取り戻した。

「と…トモノリ言つな…」

最後にそう言い、また意識を失つた。

なんとか死の危機は免れ、今はみんな休んでいる。

女生徒とトモノリはいまだ田を見まさず、セラは輸血パックをチュー

ーチュー吸つてている。

「血を吸わないと生きられないってのも、難儀なもんだな」

「私は吸血忍者になれたことを誇りに思つてますよ」

歩の問いに答えるセラに疑問を感じた。

「なれた？　生まれたときからじゃないのか？」

「吸血忍者とは、ヘルサイズ殿から不老不死の力を『えられた者』ことです。生まれた時からならば、ずっと赤子の姿じゃないですか？」

「もつとも。

「つて」とは、あいつはコーの血を畠で降らせようとしたのか？」

「ええ、やつてになりますね」

セラは息を切らしてくる。それほど血が足りないってことか。

「なんだつたら、俺の血を吸えぱい」

「あなたの血を吸うくらいなら死んだ方がマシです」

歩の親切心をバツサリ切るセラ。そんなに歩の血が嫌なのか？  
そのとおり、歩に携帯が鳴ったので少し俺達から離れた。

「どうした！　おい、ハルナ！」

「一体何があつたんだ？　歩は携帯を切つて俺達の方を向いた。

「春樹、セラ達を頼む」

「ああ、分かつた」

歩はビルから飛び降りて、ハルナ達の所へ向かつた。  
俺も疲れたので、セラの隣に座つた。

「おい、大丈夫か」

「はあ、はあ、大丈夫です」

「お前……血が足りないんじゃ」

「輸血パックじゃあ、どうも力が出ません」

「だったら俺の血を吸えよ」

「なつ！」

セラの顔が赤くなる。別に恥ずかしいことでもないだらう。

「俺はお前に死んでほしくないんだ」 春樹は吸血にキスをすることを知りません。

「ですが……」 セラは第七話の時に吸血を見られたと思つています。

「いいから、早く吸えよ！ 心配すんな」 春樹は吸血に 以下略。

「……わかりました。ですが、目を瞑つて頂けないでしょ？ つか？」

セラは第七話の時に 以下略。

「？ これでいいか？」 春樹は 以下略。

今は目を瞑つているので、何も見えない。

突然、俺の唇に柔らかい感触があつた。キスされていたのだ。

「つー！」

唇にセラの歯が刺さり、思考が回らなくなつた。

血を吸われているのがわかるのに、何故か気持ちいい。

ハルナが血を吸われた時と同じだ。

吸うのが終わり、セラを見てみると、さつきまでとは違つて肌がツヤツヤしている。

ただ、顔が真つ赤に染まつていた。

あれ？

確か吸血忍者は接吻をすると結婚なんだよな？

……まさか……。

「これで私たちの婚儀は成立しました。あなたを愛すと誓います」

朱くしながらも、はつきり言った。

「ええ――――――――――」

天に向かって叫んだ。

## 第一十話（後書き）

畏綱 するどい突きを連続で放つ技。  
鏡心 相手の攻撃を見切り、そこから反撃する神速の居合。

まさかの展開になつっちゃいました。

## 第一十一話

翌日、俺はグラウンドの隅で体育の授業を見学していた。

「「はあ」

隣に座っていた歩とため息が重なった。

「歩、何かあつたのか？」

「お前こそ、何があつたんだ？」

しばりくの無言。一度、みんなは体育に夢中なので昨日のことと言おうかと思ったが、歩から先に言いだした。

「実はな」

どうやら、ゲーセンでは大先生が京子と謎の男にさらわれたらしい。しかも、その男はゾンビだということ。  
一つ目に、トモノリに憑いていた男は大先生が彼女にいれたものだということ。

簡単に説明すると、それだけだ。

「で？ お前の方はどうしたんだ？」

「……実は……」

昨日のビルでの出来事を話すと、歩は驚愕の顔で俺を見た。

「セラが顔を朱くしていた理由がわかつたよ……」

「くそー、吸血方法がキスするなんて知らなかつたぞ」

「お前、キスのことを橋には言つたのか？」

「言つわけないだろつ！」

「そんな」と言つたら何が起きるかわかつたもんじやない。

「ヤラフイムと話がしたいから、今日お前の家にいくからな」「はいはい」

もつその話はいじりで終了した。

俺は寝つじりがり、空を見た。

放課後、瀬奈に今日は歩の家に用があると伝え先に帰らせた。歩が活動できる夕方まで学校にいると、教室にユーが現れた。

「ユー、どうした？ 一人か？」

歩が尋ねると、ユーは首を縦に振ると、俺達にメモを見せる。

『「じめんなさい』』

「「何が？」」

『「私のせいで みんなが大変なことになつた』』

まだ気にしているらしー。

「心配すんな。俺はこの口常を樂しこと想つてゐるから

俺はユーこそ本心でそつと言つべ。

「相川、一緒に帰ろうぜー」

トモノリがやつてきて、コ一は歩の背中に隠れてしまつ。

「お? もしかしてゴークリウッド? ヤベー、初めて見た。思いつきり可愛いじゃん」

歩がトモノリをゴーから離れさせようとするが、また教室から別の声がした。

「アユムーつ！ ゲーセンいこーつ！」

今度はハルナだつた。  
もしかして 次は。

「ゲーセンいくのか？ オレあまりゲームは得意じやないんだよな」「全く、吸血忍者たる者、あらゆる技を身につけなければならぬものですよ」

やつぱり来た。セラだ。

この場に俺がいるのを知らなかつたようで、俺と顔を合わせると顔が真つ赤になり、俺から視線を外した。

「しょうがないな。またゲーセン行くか？」  
「やつたーつ！」

大喜びのハルナ。寂しそうな顔をしていたユーは

『私は

結局それだけ書いたが、行かないらしい。

「セラファイム、話があるんだが、いいか?」

「ええ……いいですよ」

ゲーセンに出発する前に、俺はセラを連れて屋上まで行った。

「なあ、捷は絶対なのか?」

「はい、吸血忍者は感情よりも捷を優先しますので」

「俺はセラファイムのことは好きだが、それは恋愛感情じゃない。大事な仲間だと思つてる」

「ですが……」

「だから……このことはナシでできないか?」

セラは無言で俺の話を聞く。

「優柔不断なのはわかつてゐる。でも……だからといってお前の人間をそんな簡単に決めるなよ。お前だって俺のことと別好きじゃないだろ?」

「え?」

「ダメか?」

セラは呆れてため息をついている。

あれ? おかしなこと言つたつけ?

「……わかりました。じゃあ、このことは保留にしておきましょう」

「保留?」

「ええ、あなたがもし、私のことを好きになつたら保留を解きまし

「う  
よ

「お前はそれでいいのか？」

「はい。 それに……あなたは私があなたのことを好いてないと

言つてますが、私は春樹のことは好きですよ

セラはほほ笑む顔はとても可愛いかった。

俺は照れくさくなり、顔をそらす。

「ま、まあ、これからもよろしくな

セラは右手を差し出す。

「はい、これからもよろしくお願ひします」

セラも右手を出し、俺と握手した。

「それじゃあ、まずは……」

「ええ、そうですね……」

俺とセラは扉の方を見る。扉にはかすかに隙間が空いており、覗いているのは歩とハルナだった。

セラが高速で扉を斬り、俺は花影血桜を鞘に納めたまま姿が見えてしまった歩に思いつきり投げつけた。

歩の顔面に命中し、そのまま階段を転げ落ちた。

「覗き見とは、悪趣味ですね。このクソ虫が

セラの言葉でやられた歩。

そして俺はハルナに強めの拳骨を下した。

ゲーセンに行き夜遅くまで遊び、歩の家にお邪魔した。

セラは風呂に入り、俺達は居間で休もうかと思い行ってみると、コ  
ーは居なくて代わりに置手紙が置いてあった。

ハルナがそれを読むと、悲しい声で歩に手紙を渡した。

読み終えた歩は、手紙を俺に渡し家を飛び出した。

何が書いてあつたんだ？

『さとうなら』

そう書かれていた。

俺は驚き、続きを読んだ。

『私さえいなければ 歩もこの街もこんなことにはならなかつた』

『セラ ハルナ 春樹 歩も みんな私に優しい言葉をかけてくれ  
る それはとても嬉しくて 私はそれに甘えていた』

『でも 私は一緒に居てはいけない存在 全て 私が悪いのだから  
ごめんなさい』

『いつも大変な思いをさせてしまつて ごめんなさい このまま私  
が側に居ると いつかきっと また誰かが悲しむことになる』

『私は死を呼ぶものだから』

『だから セよなら』

……落ち着け、ここで怒つても意味がない。

俺は拳を爪が食い込むほど強く握り締めた。

探してきた歩が帰ってきて、七夕に飾った竹の前に行く。

そこで短冊を握りつぶして泣き崩れる歩。

なんて願い事を書いたのか見てみると、

『全ての願いが叶いませんよ』

だった。

ユーユー泣きながら叫んでいる歩に、ハルナが思いつきり蹴る。

「なによくよしてんだよつ！ アコムのバカつ！」

「さうですよ歩。今生の別れでもないです」

セラがバスタオルを巻いただけの姿で現れる。

「連れ戻そう！ 大先生も！ 根暗マンサーも！」

「でもな、ハルナ。ユーハは自分から出て行つたんだぞ？」

俺達が

「知るかつ！ 連れ戻すつていつてんの！」

「そうだな、早くユーハを連れ戻さないとな」

俺は歩に短冊を見せる。

「春樹、こんな願い事を書いた俺を笑つか？」

「あいにく、俺は神様なんて信じないんでね」

短冊を破り、歩の前に落とす。

「とりあえず、今は考え方。俺達は何も情報がないからな

「ああ……そうだな」

歩は元気を取り戻した。

さてと……これからどうなるんだか……。

## 第一十一話（後書き）

グダグダですみません。

この話でなんとか一巻分を終わらせることが出来ました。  
三巻まで行つたら区切りがいいので、少しオリジナルを入れてみたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1115y/>

---

これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

2011年11月21日12時04分発行